

令和元年度

報告書

国際キャリア 教育プログラム

UTSUNOMIYA UNIVERSITY

国際キャリア合宿セミナー

国際キャリア教育

国際キャリア実習

主催：大学コンソーシアムとちぎ・宇都宮大学

開催趣旨

宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。 そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア教育プログラム」です。



このプログラムの科目は、学生が働く意味やキャリア教育について考える「国際キャリア教育」、英語で全て授業を行う「International Career Seminar」、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の3科目、6単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行い、講義は1科目2泊3泊の集中合宿方式で、キャリア実習は80時間で行います。

共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化(Glocalization)」という2つの観点からアプローチしていきます。具体的には、「国際キャリア教育」と「ICS」では、「国際ビジネス」、「国際協力・国際貢献」、「多文化共生と日本」、「異文化理解・コミュニケーション」の4つ分野の専門家を講師に迎えて分科会を実施します。また、「国際キャリア実習」では、「国際協力・国際貢献」や「異文化理解・コミュニケーション」の分野に関わる魅力的で個性的な国内や海外の研修先での研修を用意しています。以上の3科目すべての実習を勧めていますが、いずれかを選択して受講することも可能です。

本プログラムは、2004年から毎年実施され、16年目を迎えました。宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から大学生、社会人が多数参加しております。今年度は台風第19号のため、International Career Seminarはやむなく中止となりましたが、参加者数は今年度で合計約1720名に達し、グローバル時代における若者の国際キャリアに対する期待と関心の高さがうかがえます。

この度は「国際キャリア教育プログラム」の活動内容をまとめた令和元年度の報告書を発行する運びとなりました。今後もグローバル化を取り巻く状況を多様に変化していくと思われませんが、関係各位におかれましては、本プログラムに対する一層のご理解ご協力を賜りますようお願いいたしますとともにグローバル人材育成の一助として本報告書をご活用頂ければ幸いです。

最後に、本プログラムは、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、栃木県から「とちぎグローバル人材育成プログラム」を通して、ご支援を頂き、心より感謝申し上げます。また、宇都宮大学国際学部同窓会、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、NPO法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA 筑波センターからご後援をいただきました。また、(一財)栃木県青年会館、(公財)あしぎん国際交流財団からはご協賛をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

国際キャリア教育プログラム委員会 委員長
宇都宮大学 国際学部 教授
重田 康博

目次

開催趣旨 1

第1部 国際キャリア合宿セミナー

1. 目標とルール 3

国際キャリア教育

1. 概要 4
2. 開催日程 5
3. 全体講義 6
4. 分科会・講師及び講義概要..... 11
5. パネルトーク 42

附 表

1. 参加者名簿 45
2. 参加者全体コメント 46

第2部 国際キャリア実習

1. 実施要項 48
2. 今年度受入団体および実習概要一覧..... 52
3. これまでの受入団体および実習概要一覧..... 52
4. 実習生からの報告 55

国際キャリア合宿セミナー

目標とルール

目標

- 「働く」とはどのようなことなのかについて考える。
- 自分と地域社会や世界とのつながりについて考える。
- 主体的に関わりたい分野を見つけ、今後の学びに向けた“きっかけ”を得る。

ルール

- どんな意見も臆せず、積極的に発言しよう。
- 一人ひとりが参加者の自覚をもとう。
- 異なる意見を尊重するとともに自分の意見をもとう。
- 自分独自の意見を述べよう。
- 多様な発想を生み出す雰囲気をつくろう。
- 時間厳守で行動しよう！
- 安全、健康に注意をしよう。



AIM

- Engage with those who wish to work on the world stage.
- Grasp the image of “working in society with motivation.”
- Provide opportunities to think about your roles in local and global societies.
- Find motivation to actively pursue your career.

RULES

- Speak out! Share your opinions freely.
- Make sure that we are all participants.
- Have your own ideas as well as respecting different ideas of others.
- Express your own opinion.
- Try to make a congenial atmosphere to encourage interest and creativity.
- Always be punctual.
- Pay attention to safety and to your health.



国際キャリア教育

1. 概要

🌐 目的

－問題解決能力を身につける－
国際的な分野で仕事をするための専門的知識と実務能力の向上に向け、第一線で活躍する講師を招き、演習を通して高度な専門知識や技能、仕事への姿勢を学び、国際キャリアの具体化を目指します。

🌐 開催日程

2019年9月14日（土） ～ 9月16日（月）
<2泊3日>

🌐 会場

コンセーレ栃木県青年会館 〒320-0066 栃木県宇都宮市駒生1丁目1-6



全体講義



ワークショップ



パネルディスカッション



分科会



分科会



中間発表



全体発表



振り返り



閉講式

2. 開催日程

1日目（9月14日 土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
9:00 9:30	受付	13:20 15:20	パネルトーク 「グローバル時代におけるキャリア形成について」
9:30 9:45	開講式 オリエンテーション	15:50 17:50	分科会
9:50 12:00	全体講義 ワークショップ	18:00 18:20	チェックイン
12:00 12:10	記念撮影（集合写真）	18:30 20:00	交流会
12:10 12:50	昼食	20:00 24:00	入浴・就寝
13:00 13:20	趣旨説明 分科会・プレゼン方法の説明等		

2日目（9月15日 日曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
7:30 8:20	朝食	17:30 18:30	中間発表
8:30 12:00	分科会	18:30 19:30	夕食
12:00 12:50	昼食	19:30 21:30	発表準備（自由）
13:00 15:30	分科会	19:30 24:00	入浴・就寝
15:30 17:30	分科会まとめ 中間発表準備		

3日目（9月16日 月曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
7:30 8:20	朝食	12:20 13:10	昼食
8:30 8:50	荷物整理・チェックアウト	13:20 15:00	振り返り、意見交換、全体総括、 アンケート記入
9:00 10:00	発表準備	15:00 15:15	閉講式（修了書授与）
10:00 12:20	全体発表 （発表10分、質疑応答5分、講評5分）	15:30	バスで宇都宮駅・宇大に移動 解散（現地解散も可）

3. 全体講義



混迷の時代の国際キャリアを考える — 真のグローバル人材に必要な条件 —

重田 康博 (しげた やすひろ)

宇都宮大学 国際学部 教授 / 国際キャリア教育運営委員会委員長

略 歴：

北九州市立大学大学院社会システム研究科博士後期課程修了 (博士・学術)

国際協力推進協会 (APIC) 主任研究員、クリスチャン・エイド客員研究員 (イギリス・ロンドン)、現、国際協力 NGO センター (JANIC) 主幹等を経て現職。専門は国際開発研究、国際 NGO 研究。開発教育協会評議員、JVC とちぎネットワーク代表。CMPS 福島乳幼児妊産婦プロジェクト・アドバイザー、JANIC 政策提言アドバイザー。著書に『NGO の発展の軌跡』(明石書店 2005)、『国際 NGO が世界を変える』(共著、東信堂 2006)、「第 4 章 ミレニアム開発目標」田中治彦編著『開発教育—持続可能な世界のために』(学文社 2008)、重田康博『激動するグローバル市民社会—慈善から公正へ発展と展開』明石書店、2017 年

全体講義の概要

今世界は混迷の時代とされています。その混迷の時代を生きるための真のグローバル人材とは何か、その必要な条件を具体的な事例を示しながら紹介し、国際キャリア形成について考えます。



★最初に、混迷の時代とはどのような時代なのかを説明します。

21 世紀は 9.11 米国同時多発テロに始まり、今日まで世界のいたるところで、未曾有の危機が発生しています。米国などの主導による経済のグローバル化の進行により、かつての先進国と途上国の間の格差だけではなく、同じ国の中の富者と貧者、都市生活者と農今世界各地で、国家の分断、孤立、難民・移民の排除、自国第一主義とポピュリズムの波が押し寄せ、第 2 次世界大戦後世界の多くの国が目指してきた、「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の危機が叫ばれています。

このような「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の崩壊の危機の中で、NGO・CSO (市民社会組織) も含めたグローバル市民社会による多元主義の再構築と公共圏の形成が求められています。

この危機をどのように乗り越えるのか、どのように「国際協調主義」と「共生できる寛容な社会」を取り戻せるのでしょうか。混迷する時代を生きるためにグローバル人材をどのように育成すればいいのでしょうか。

★次に、「グローバル人材」とは、何かを説明します。

では、「グローバル人材」にはどのような能力が求められるのでしょうか。2011 年 6 月文部省「グローバル人材育成推進会議」中間まとめでは、そのポイントとして、「語学力向上 (英語)」と「内向き志向」の克服で、その取組みは「英語」と「海外体験」となっています。しかし、この「英語」と「海外体験」だけで今の混迷の時代を生きるグローバル人材を育てられるのでしょうか？

★第3に、宇都宮大学や国際学部のグローバル人材の育成の事例を紹介します。

☆宇都宮大学グローバル構想—「地域からのグローバル化」「地域のグローバル化」に貢献

☆国際学部国際学科において養成する人材像（改組に伴い2017年4月から実施）

⇒21世紀型グローバル人材（グローカル人材）の育成

☆国際学部の卒業生は、その多くがグローバル企業、マスコミ、NGOなどで働き、国内外で活躍しています。



★最後に、地球公益を目指す「グローバル（地球）市民」について説明します。

「グローバル（地球）市民」として生きるためには、「グローバル（地球）市民社会」の育成が必要だと思えます。つまり、「国際協調」を超えた「地球公益」を求めていく人間や社会を育て、「非寛容社会」から「寛容社会」への価値観の転換が求められています。

☆国連による「持続可能な開発目標（SDGs、Sustainable Development Goals）」は、2015年9月の国連総会で採択され、17の目標と169のターゲットからなり、2016年から2030年までの15年間世界の国々はこの開発目標の達成に向けて取り組み、その達成のために、国際機関、国家、企業、NGO・CSOが問題の解決に向けて取り組むことが求められています。

☆「地球公益（地球市民のための公益、Global Public Interests）」とは、公正な地球社会を求める世界の人々のための非営利活動です。その根底にあるのは公正、寛容、包摂、共生、多様性、多文化です。「地球公益」を求めることは、グローバルマインドを養い、グローバル人材を育成することだと思えます。

参考文献

- 駒井洋監修/五十嵐泰正・明石純一編著『「グローバル人材」をめぐる政策と現実』明石書店、2015年
- 加藤/九木元『グローバル人材とは誰か 若者の海外経験の意味を問う』青弓社、2016年
- 重田康博『激動するグローバル市民社会—慈善から公正へ発展と展開』明石書店、2017年
- 友松篤信『グローバルキャリア教育—グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版 2012年


1 2019年度国際キャリア教育セミナー
グローバル時代のキャリア形成を考える

- 全体講義：
- 「混迷の時代における国際キャリアを考える
—真のグローバル人材に必要な条件—」

重田 康博
宇都宮大学国際学部教授/
国際キャリア教育運営委員会委員長


2 はじめに：自己紹介

- 私の名前は、重田康博（しげたやすひろ）通称ヒゲ先生。
現在宇都宮大学国際学部・大学院国際学研究所教授、
東京都出身。
- 学部担当科目：
地球市民社会論、国際協力論、
国際協力実習、国際キャリア教育、国際キャリア実習、卒業実習
- 大学院担当科目（博士前期）：
国際ボランティア論、国際協力研究、国際NGO起業論
- 大学院担当科目（博士後期）：
国際NGO論
- 国際学部多文化公共圏センター副センター長
—グローバル教育セミナー
日光プロジェクト
- 国際キャリア教育プログラム運営委員長
- ESD-GAPワーキング・グループ委員



自己紹介

- 国際協力や国際NGOの活動に約30年以上関わる。
国際NGO活動、
● アジア諸国（タイ、フィリピン、カンボジア、ラオス、スリランカ、ベトナム）で調査。
現在はカンボジアの調査を行う。
● これまで世界約30カ国以上訪問
- 今後の自分の課題：アジアの市民社会スベース、日本の市民社会・NGO文化の育成、アジアの環境社会記



4 本日の構成

- 1 混迷の時代とはどのような時代なのか？
- 2 「グローバル人材」とは何か
- 3 どのような「国際キャリア」を目指すのか？
- 4 地球公益を目指す「グローバル（地球）市民」—21世紀型のグローバル人材（グローカル人材）を考える

5

1 混迷の時代とはどのような時代なのか — 続く世界の激変

- 米国第一主義をアピールし内向き志向の米国トランプ大統領
- イギリスの国民投票によるEU離脱 (Brexit、ブレクジット) の決定、
- 中国の「一帯一路政策、アジア、アフリカの中国化
- 独裁的・権威主義的な国家の台頭と市民社会スペースの縮小
- シリア難民、ロヒンギヤ難民の流入
- イスラム過激派集団 (アルカイダ、IS) の台頭
- 日本の自然災害・原発災害
- 今日世界各地で、国家の分断、孤立、不寛容、難民・移民の排除、自国第一主義とポピュリズムの波が押し寄せ、第2次世界大戦後世界の多くの国が目指してきた、「国際協調主義」「共生できる寛容な社会」の危機

7

求められる能力

- 2011年6月「推進会議 中間まとめ」
- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ
- ポイントは、「語学力向上」(英語)と「内向き志向」の克服、取組みは「英語」と「海外体験」

9

3 どのような「国際キャリア」を目指すのか？

11

4 地球公益を目指す「グローバル (地球) 市民」—21世紀型のグローバル人材 (グローバル人材) を考える

- 混迷の時代にどのように人材を育成するのか？
- どのような能力を求められるのか？
- 英語と海外体験だけではない
- 「システミック・リスク」を予想し克服する力が必要
- 「選択肢の多様化」を生き抜ける人材が求められる
- 国境を超えるグローバルマインド
- 「多様な文化や価値観との相乗効果によって、新たな価値を生み出す」とする発想と行動様式。(友松篤信、2012)
- 「グローバル・マインドを育成して自発的・自律的なキャリア形成を促す教育を『グローバルキャリア教育』と呼ぶ」(友松篤信、2012)

13

国連による「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals : SDGs)」 2030年まで

目標1: (貧困) あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つこと
 目標2: (食料) 持続的に食料を生じ、食料の栄養価向上と食糧廃棄の削減を達成するとともに、持続可能な農業を推進すること
 目標3: (健康) すべての年齢層の人々の健康と福祉を促進し、寿命を延長すること
 目標4: (教育) すべての人々の包括的で公平な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進すること
 目標5: (ジェンダー) の平等を推進し、すべての性別に均等なエンパワーメントを達成すること
 目標6: (水とトイレ) すべての人々に安全と衛生確保のアクセスと持続可能な管理を確保すること
 目標7: (エネルギー) すべての人々に信頼できる、持続可能な現代生活に必要なエネルギーへのアクセスを確保すること
 目標8: (経済と雇用) すべての人々のための包摂的、持続可能な経済成長を、生産的な完全雇用とディーセント・ワークを推進すること
 目標9: (インフラ) 強靱なインフラを構築し、包摂的に持続可能な工業化を推進するとともに、イノベーションを促進すること
 目標10: (不平等) 国内と国際間の不平等を縮減すること
 目標11: (都市と住居) 安全と人間的な都市を創出し、安全、強靱かつ持続可能な都市を創出すること
 目標12: (持続可能な消費と生産) 持続可能な消費と生産のスタイルを推進すること
 目標13: (気候変動) 気候変動への対応を急ぎ、気候変動の被害を減らすこと
 目標14: (海洋資源) 海洋と海岸資源を持続可能な開発に向けて健全にし、持続可能な形で利用すること
 目標15: (陸上生態系) 陸地生態系、生物多様性、その他の陸地資源を持続可能な形で保全し、回復させ、持続可能な形で利用すること
 目標16: (平和と正義) 持続可能な開発に向けて安全で包摂的な社会を構築し、すべての人々に司法へのアクセスを確保するとともに、あらゆるレベルで公正で包摂的な司法制度の構築を推進すること
 目標17: (気候と世界の目標) 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化させること

15

5 地球公益を目指す「グローバル (地球) 市民」—21世紀型のグローバル人材 (グローバル人材) を考える

- 混迷の時代にどのように人材を育成するのか
- 「グローバル (地球) 市民」として生きる→「グローバル市民社会」の育成
- 「国際協調」を超えた「地球公益」を求めていく
- 「非寛容社会」から「寛容社会への価値観の転換」

6

2 「グローバル人材」とは何か？

- 2009年「新成長戦略実現会議」の開催
- 2010年「グローバル人材育成推進会議」設置
- 2012年度「グローバル人材育成事業公募」
- 日本経済の景気後退、若い世代の「内向き志向」の克服
- 中国、韓国、インドの台頭、アジア諸国の国際的な産業競争力の向上や国と国との絆の強化
- グローバルな舞台に活躍できる「人材」の育成
- 大学教育のグローバル化を目的とした体制整備を推進する事業に対する政府の財政支援、採択42大学、50億円支給


8

「優れた取組」を評価する観点 (日本学術振興会)

- 1 教育課程の国際有用性 (大学の改革)
- 2 グローバル人材としての能力の育成 (学生の育成)
- 3 語学力向上のための体系的な取組 (学生の育成)
- 4 教員のグローバル教育力向上 (大学の改革)
- 5 日本人留学生の留学を促進するための環境整備 (学生の育成)

12

国連による「持続可能な開発目標 (SDGs, Sustainable Development Goals)」



Public Private ACTION for Partnership!!
 ~SDGsで日本を元気に、世界を元気に
 その主役はあなたです!~

この3つの共通のキーワード：選択肢の多様化
 日本で社会人の「学び直し (Recurent)」がむずかしい理由
 1 時間、2 お金、3 目的の欠如、4 企業姿勢

『LIFE SHIFT - 100年時代の人生戦略』

14

国連による「持続可能な開発目標 (SDGs, Sustainable Development Goals)」

- 2015年9月の国連総会で採択、17の目標と169のターゲット、2014年から2030年までの15年間の世界の国々はこの開発目標の達成に向けて、国際機関、国家、企業、NGO・CSOが課題の解決に取り組みることが求められている。
- 宇都宮大学国際学部が目指しているゴールとして、以下の7つが考えられる。
- ゴール1: 「貧困をなくそう」
- ゴール4: 「質の高い教育をみんなに」
- ゴール5: 「ジェンダー平等を実現しよう」
- ゴール10: 「人や国の不平等をなくそう」
- ゴール11: 「住み続けられるまちづくりを」
- ゴール13: 「気候変動に具体的な対策を」
- ゴール16: 「平和と公正をすべての人に」

16

宇都宮大学国際学部の卒業生の例(2017年8月):

Hさん(日系大手商社タイ支社現地採用職員)女性 2001年卒業
 留学(タイ、カセサート大学3年生)、留学中タイのNGOで半年間ボランティア活動(3年生)、在タイ年数17年、タイ大手商社勤務11年

- 1 国際学部や国際キャリア合宿セミナーで学んだこと
- 個性的な先生や学生が多い
- 第2外国語でタイ語があるのがうれしい、留学制度がある
- 2 タイに留学してどうだったか
- 留学して日本を第三者的に見ることができた
- 異文化の中で積極的にになり、いろいろなことに関心を持つ
- 3 先輩へのアドバイス
- コミュニケーション能力の向上
- 自分のやりたいことをやって欲しい
- 仕事を何を残すのかを考えて欲しい

- AI との競争や経済紛争など 21 世紀の国際問題に共通しているのは倫理の問題がかかわっているという点である。すでに動き出しつつあるこの問題に対応していくにはグローバル人材としての能力を養っていくことが重要だと思った。グローバル人材としての要素の中で私が一番大事と考えるのは、「異文化理解・日本人としてのアイデンティティ」である。
- 貧困・難民・地域の多文化共生には、報道の問題が共通している。世界ではあらゆるところで貧困に喘ぐ人々がいて、ロヒンギャ難民やメキシコ難民の問題があるにも関わらず、日本のメディアはほとんど報道しないため認識度が低い。メディアや自分で調べることで知るきっかけがあれば、そのことに興味を持ち募金やボランティアなど支援の輪が広がっていくと思う。よって、国際的な社会問題についてもっと若者が関心を持ち自ら調べていくべきである。
- グローバル人材として活躍していくためには、コミュニケーション力を磨くことは重要。語学はコミュニケーションツールのひとつとして、様々な人々とかかわっていききたい。
- キャリアを積んでいくうえでとらえ、柔軟性を身につけることが必要である。そのためには現状に安住するのではなく、他地域、他国、多文化社会に行き、多くの経験をするのが重要であると思う。
- グローバル人材の育成として内向き志向の克服が挙げられていたが、もともと日本人は消極的な部分が多いため、それを正そうと試みたとしても、日本人の根本が変わらないと無駄になってしまうのではないかと思った。またリカレント教育の推進によって今は一つの職業に縛られない働き方が広がっていることを知った。やりがいや楽しさを求めて自分のやりたいことを追求できるのは、選択肢をひろげることにもつながると思った。
- 学び直しの難しさを取り上げた時、企業側は私たちに対して十分な制度や政策を与えられているのか？
- 今気になること。メディアー情報伝達のスピードが速くなっている中で判断が求められる。どれが正しくてどれが間違っているかだけでなく、それを判断するスピードも速くなくてはならないと思う。難民ー難民の問題意識が薄れてきている。いることが当たり前になっている。日本がどれくらい難民政策に取り組んでいるのか。長距離弾道ミサイルなどに対しての危機感が薄れている。ミサイルや核実験の報道に慣れてしまった。日韓ー関係性が日々悪化している。国同士の問題にとどめておくべきなのに、日本人/韓国人そのものを嫌っている人がいる。LGBTー教育やメディアが大きく関係している。幼いころから偏見なく学んでいれば差別や一方的な思い込みは生まれないのではないか。AIーAI と人間がうまく共存できる道を探さなければいけない。自動運転などの最新技術をどう活用していくのが鍵。
- AI を活用するとともに、人間がどのように生きていくのか？グローバルマインドは何のマインドなのか？自分の意見は、異なる文化背景を持っている人々の意見を尊重し、国ごとではなく、地域と人類全体の視角からものごとを捉える考え方。
- 海外体験が増えるのはよいことだが、教育格差が生まれるのでは。
- AI に頼らずに生きるために必要なことは？
- 国際学部だけではなく全学部が意識すべきでは？
- グローバル人材というと海外で活躍できるとイメージがあるが、国内→国外、国外→国内というように世界全体で様々なアプローチが可能なことだと思った。
- AI が人間の代わりに仕事をしてくれると現在働いている労働者は仕事を失い、将来失業率が上昇するかもしれない。仕事を失った失業者たちは、お金をもらえず、生活できなくなる。そして、産業革命のときに起きたラダイト運動が発生するかもしれない。それによって、犯罪率の上昇や社会が不安定になる問題などが発生しかねない。だから AI は人々に便利な生活をもたらす一方で様々な問題も存在している。それらの問題に関する解決法を私たちはこれから考えなければならない。
- 時代が変わっていけば、求められる人材も変わっていく。私たちはそれに対応していかなければならない。
- グローバル人材になれるように、大学での勉強をして、夢を叶えられるようにしたい。
- 世の中の様々な問題は一見それらが別々に存在していると思いがちだが、その問題が発生している原因や背景などを調べてみるとつながっているものもあることに気づいた。
- AI の技術はどこまで発展するのか。結果的に人間の能力を超えてよいのだろうか。人間の温かみなどを生かせる仕事をもっと作らなければいけないのだろうか。

4. 分科会・講師及び講義概要

分科会 A	変革の時流に乗って
講 師	石川 尚子 氏 オリオンコンピュータ株式会社 代表取締役 オリオンIT 専門学校 理事長
分科会 B	自己矛盾が無い、を仕事にしてみたら
講 師	伊藤 解子 氏 国際協力コンサルタント NPO 法人日本国際ボランティアセンター (JVC) 理事
分科会 C	国際協力とキャリア：多様な生き方と無限の可能性
講 師	飯塚 明子 氏 宇都宮大学 留学生・国際交流センター 助教
分科会 D	超高齢社会を考える
講 師	佐藤 栄治 氏 宇都宮大学 地域デザイン科学部 建築都市デザイン学科・准教授
分科会 E	いくつもの日本～アイヌ民族から考える多文化共生～
講 師	廣瀬 隆人 氏 宇都宮大学 地域創生推進機構 コーディネーター 一般社団法人とちぎ市民協働研究会 代表理事
分科会 F	人の力を掛け算にするコミュニケーション
講 師	岩井 俊宗 氏 特定非営利活動法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事

分科会 A



変革の時流に乗って

石川 尚子 (いしかわ ひさこ)

オリオンコンピュータ株式会社 代表取締役

オリオンIT 専門学校 理事長

略 歴：

栃木県立今市高等学校卒業後、地元企業に就職。いくつかの職業を経験の後、最後の仕事で出会ったコンピュータの可能性を感じ、1998年オリオンコンピュータ(株)設立。その後2005年オリオンIT専門学校設立。現在、アジア圏の留学生に沢山学んでいただいております。

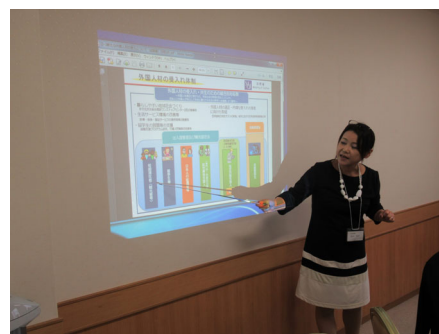
🌐 講義の概要

1. 仕事の内容・研究テーマ

私は30歳の時に、「オリオンコンピュータ(株)」を起業しました。初めは小さなパソコン教室から始まり、37歳で「オリオンIT専門学校」を設立しました。社名の通り、コンピューターと教育に関わる仕事を20年以上続けています。その中で、私の仕事は「繋ぐ」事だと考えて行動しています。

人と人を繋ぐ・国と国を繋ぐ・人と社会を繋ぐなど、ITと教育を駆使して「繋ぐ」を実践していきます。今年も、新たな事業にも取り組もうと準備を重ねています。

皆さんにお会いする時には、その事業が立ち上がっていたら幸いです。



2. キャリアパス

栃木県で生まれ・育ち、地元の高校を卒業後、地元の企業に就職。何度目かの転職先で、「コンピューター」に出会う。

このコンピューターとの出会いが、私の人生に大きな影響を与える。

「バブル崩壊」の波が地元栃木にも押し寄せた頃、初めて「不況」という体験をする。

しかし、経験の浅い(無知な)自分には、事の重大性が理解できず、「何とかなる」と安直に考えていた。そして、30歳で起業する。

3. 分科会の内容

日本では、この4月から入管難民法の改定に伴い、多くの外国人労働者の入国が予想されます。勿論、日本でもこの外国人労働者の受け入れにより、働き方や社会などに大きな変革がもたらされると考えられます。特に、栃木県を含めた地方においては現在も多くの業界が人手不足に悩まされており、今回の入管難民法の改正は人材確保の追い風となることと思います。

一方で、外国人労働者を人手不足解消の為に労働力という一面のみで捉えていては、到底定着には至りません。これは過去の海外の移民政策の事例をみても明らかです。この変革の時流にどのように乗り越えて



行くか?について皆さんと議論しながら「今、私たちに出来る事・やるべき事」を探って行けたらと思っています。

4. キーワードリスト

- 出入国管理及び難民認定法とは何か?
- 移民政策とは何か?
- 共生とは?

5. 参考資料等

- 「共生の社会学」岡本 智周 著書
- 「今や世界 5 位 移民受け入れ大国 日本の末路」三橋 貴明
- 「ふたつの日本 移民国家の建前と現実」…望月 優大



6. 事前予習用リーディング課題

もし、自分が外国人の方と一緒に働くことになったら、どのように接する事がお互いを成長させられると考えますか?

そして、その理由も考えて来てください。

参加者による全体発表

今後の外国人労働者との共生に向けて

分科会A:	神谷 和希
青野 ななこ	藤部 花菜
石山 ちひろ	濱 詩織
岩崎 圭汰	本多 美未
片山 精河	村越 紀香

目次:

- ① 学んだこと
- ② 技能実習生制度とは?
- ③ 解決すべき問題
- ④ アクションプラン
- ⑤ 結論

① 学んだこと

② 技能実習生制度とは?

- ① 三年から五年で必ず帰国
- ② 自国の発展のために日本の技術を学ぶ
- ③ 最低賃金で働く
- ④ 業種や会社は変えられない
- ⑤ 契約と違う職に就けない

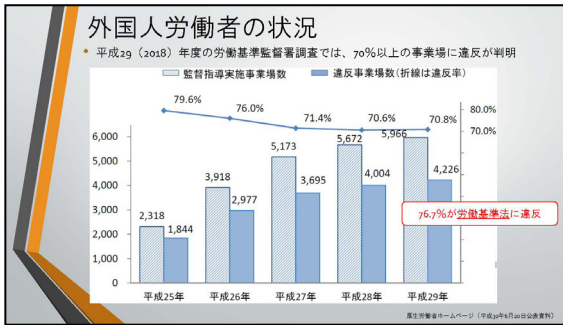
③ 解決すべき問題

事例1: ベトナム人の実習生が本来は鉄筋専門であるにも関わらず原発の除染作業をさせられた。
(毎日新聞 2019.9.4)

事例2: ベトナム人の実習生が本来は服飾の勉強をする目的であったがタオルを作らされ、過酷労働を強いられていた。
(バリバラ 2019.2.3 19:00)

現状

- 言語の壁
- 外部サポートの不足
- 劣悪な労働環境

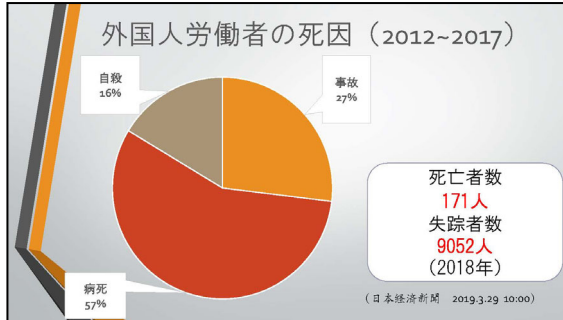


課題

- 労働環境改善

理由

- 外国人労働者の本来の目的を達成するため
- 労働三権を守るため
- 持続可能な人材確保のため



現状

- パワハラ・セクハラ
- いじめ
- 病気になっても病院に行かせてもらえない

課題

人権問題

理由

- 命の危険がある
- 共生のためには対等な関係を築くべき

④ アクションプラン

①実習生と交流する会を開く

学生や日本に長年働いている外国人→実習生

成果

- 情報を得る手段を知ることができる
- 学生自身も実習生への理解が深まる

②アンケートの実施

学生・ボランティア→外国人労働者・雇用者

成果

- 現状を知らない人に知ってもらう
- 伝えたいことが伝わる

③やさしい日本語を使用（イラストや漫画を含む）

企業→労働者

成果

- 言語の壁の克服
- 異文化の不安を解消
- 労働者が理解した環境で働ける

⑤ 結論

2つの課題

- 労働環境改善
- 人権問題

→ 改善することで日本における共生は進む!

ご清聴ありがとうございました。

参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 分科会を通じて学んだ外国人労働者に関することを自分の身の周りに活かしたい。
- これからはますます外国人が増え共生が求められる社会となる。共生のためには、まず今ある技能実習生の問題を解決するべき。

- 外国人労働者について深く学ぶことができた。もともと興味があった分野であるため更に知ることができ興味が増した。
- 超高齢社会の現在の日本は労働力不足が深刻である。今回の分科会テーマ「変革の時代に乗って」は自分たちが社会に出るときのテーマであると感じた。
- 今回外国人労働者の制度や実態について学び、この問題は日本にとって重要な課題であると思った。日本は外国人労働者をただの労働力としてみる考えを改め、一人一人の人間として対等に関わるべきである。日本は受け入れ国として人権を守る義務がある。また、外国人労働者の問題について、一般の人々がもっと考えるべきだと思う。そのためにも、私自身、さらに学びを進めたい。
- 分科会 A のテーマは「変革の時期に乗って」であったが、外国人労働者についてだけでなく、AI の技術が進み仕事なくなっているという中で自分の強みは何か、本当にやりたいことは何かということこれからしっかり考えていくことが大切だと思った。
- 外国人と関わったり、英語を使った仕事に就きたいというざっくりとした考えしかなかったが、移民などの勉強をもっとして、外国人労働者と直接関わるような仕事や日本語を教える仕事もよいと感じた。日本で外国人労働者を派遣する仕事に就くのではなく、派遣先で困っていたり外部に頼ったりできない外国人のための外部サポートとして働く方になり手助けできたらよいと思った。
- 劣悪な環境におかれ、人権を侵されているにも関わらず誰にも助けを求められない過酷な状況にいる人々に手を差し伸べてあげられるような仕事に就きたいと思った。この分科会を通して将来のキャリアの視野が広まった。
- 世界の貧困問題や人権問題についてしかこれまで注目してこなかったため、勝手に日本には平和でそのような問題はないと思った。しかし、分科会を通して、日本で働く労働者やアイヌ民族など同じ日本なのに差別や迫害を受けている人がいまだにいることを知り、世界だけでなく、日本の問題にも目を向けていかなければならないと思った。
- 分科会では技能実習制度の問題点について学び、そこで生じている様々な問題点を知った。そこには文化的要因も含め言語や認識の違いが壁にあった。これらの要因を解決するために、私たちができることは何なのかを詳しく深く考えていくべきである。
- アクションプランに伴うリスクや対象となる問題がおこる背景について考える必要があると学んだ。これに加え、この背景を捉える視点については、人によって様々であり問題解決へのアプローチも様々存在するという事を知った。
- 昨年ほどから入管難民法改正において現状の外国人労働者について問題がとりあげられるようになった。今回、本質的な問題をもっと勉強したいと考えたが、十分に自分の知りたいことや他の人の問題に対する意見を知れたことでとても満足している。
- 現状として、私が思うよりもより深刻に外国人人材への人権侵害や搾取が行われているということを知り驚いた。知らないことを恥だとも思った。周りにこれを知らせていく必要もあるのではないかと考えた。



分科会 B



自己矛盾が無い、を仕事にしてみたら

伊藤 解子 (いとう ときこ)

国際協力コンサルタント

NPO 法人日本国際ボランティアセンター (JVC) 理事

略 歴：

大学経済学部卒業後、英国大学院（開発学、地域学（東南アジア））留学。東南アジアで日系企業勤務後、NGO（公社）シャンティ国際ボランティア会（SVA）で東南アジア、アフガニスタン等での教育協力事業に14年間従事。JICA本部、短期専門家（ラオス初等教育事業）などを経て、2016年より現職。主にODAの事業評価業務に従事。



講義の概要

1. 仕事の内容・研究テーマ

NGO勤務時は教育開発、事業運営・評価手法、ODAへの政策提言。現在は日本のODA事業（有償資金協力、無償資金協力、技術協力）について、通常事業完了後3年目に実施される事後評価にスキーム、分野、地域問わず従事。経済協力開発機構（OECD）開発援助委員会（DAC）で採択された国際的評価基準に基づいた評価を実施。学生時代に抱いた目標、「より良い国際協力」に貢献する仕事を続けてきました。



2. キャリアパス

<大学、大学院時代>

両親の影響で、幼い頃から平和な差別のない社会の実現について、問題意識を持って育つ。大学時代、日本のODA供与額が世界一となった一方、ODAの質への批判が高まる。ゼミでは南北問題をテーマにし、学外でのODAの実態に関するジャーナリスト、NGOの報告会に通う。サークルでは日韓学生交流会、模擬国連等に所属。開発を体系的に学び、英語力をつけるため就活をせず大学院留学。留学先では学業に没頭しつつ、学生寮に住み留学生たちと知り合い、生涯の親友を得る。休みには学割で欧州、アフリカ、東南アジア旅行。

<民間企業からNGOへ>

NGO就職を前提に社会人経験を得るため英国から直接東南アジアへ。単身就職活動後、就労ビザの壁を越えて日系企業に就職（クアラルンプール、シンガポール）。日本人の駐在員と現地採用の格差を目の当たりにしながら、急速に発展するアジアのOL生活を満喫。2年半後、日本へ帰国し念願のNGO就職（SVA東京事務所（カンボジア担当））達成。

<NGOでの10年>

入職2カ月後、研修のはずが倒れた同僚に代わり3カ月間の現地駐在。東京では主に後方支援（ご支援者対応、資金調達）業務。ご支援者に鍛えていただく。カンボジア駐在し帰国後、アフガニスタン事業担当に異動。以降、緊急救援事業（パキスタン、バングラデシュ）、事業研究・評価調査、NGOのネットワーク（政策提言、NGO職員研修）業務に従事。愛・地球博出展で名古屋1カ月駐在も経験。NGO事業の醍醐味や限界、基礎教育協力の魅力と意義、始めるより終える大変さを痛感しながら、あらゆる業務を経験する。

<英国留学を経て、スリランカに駐在>

ケニアでの経験を通して、英語力を付けたいという思いが高まり、英国の大学院で開発経済学を専攻。授業でフェアトレードについて学び、日本で売られているフェアトレード商品に興味を持つようになる。「フェアトレード コーヒー」で検索して、最初にヒットしたのがいま勤務している団体。イギリスまで送ってくれるよう注文したところ、とても感じよく対応してくれ、さらに飲んだコーヒーが美味しかったので、求人を見つけて応募。スリランカでの勤務となる。スリランカでは、内戦後の社会で様々な困難に直面しつつ3年間復興事業を担当。

<NGO でのマネージメント時代～現在>

入職後9年目以降、海外事業課課長、ラオス事務所所長職として組織・事務所運営（総務、経理、人事）に従事。仕事に全力投球した結果、自分にインプットが必要と考え退職。半年休んだ結果自己矛盾のない国際協力で働くことに。就活に苦戦後転職先で仕事と組織に慣れず退職。NGO 時代の友人に助けられ難民支援調査や教育支援事業に従事しつつ、合間に関心があった事業評価の勉強、キャットスペシャリスト資格取得、保護猫シェルター・ボランティア、念願のカフェでのバイトで過ごした後、現在の会社へ。事業評価を仕事に。

3. 分科会の内容

国際援助業界で働くとは。国際協力事業とは。NGO でも ODA 事業でも共通して大切なこととは。仕事を通して目指すもの、価値観とのせめぎ合いとは。仕事を具体的にイメージできるようになることを目的に、ワークショップ、ディスカッション形式で進めます。

分科会 1：参加者自己紹介。国際協力、国際援助の仕事紹介（国際機関、JICA、NGO の事業について、そのなかで自分の価値観に見合う仕事とは）。

分科会 2&3：国際協力「事業とは」？何を目指し、どんな方法で、何をする？そのうえで各段階での事業実施においてどういった能力が必要かを考え議論します。

4. キーワードリスト

- 国際協力
- 政府開発援助（ODA）
- NGO
- 事業運営
- 政策提言



5. 参考資料等

- アマルティア セン『人間の安全保障』集英社新書、2006年
- JICA ラオス「コミュニティイニシアチブによる初等教育改善プロジェクトフェーズ2」プロクト概要、ニューズレター（可能な範囲で結構です）
- <https://www.jica.go.jp/project/laos/013/index.html>（参照 2019年6月10日）
- シャンティ国際ボランティア会編『図書館は、国境をこえる—国際協力 NGO 30年の軌跡』教育史料出版会、2011年
- フランクリン・コヴィー・ジャパン（監修）『COMIX 家族でできる7つの習慣』PHP、2015年

6. 事前予習用リーディング課題

- 「第3部 国際教育協力のアプローチ：第8章、第9章、第10章」小松太郎編『途上国世界の教育と開発・公正な世界を求めて』上智大学出版、2016年；pp.115-160

参加者による全体発表

自己矛盾がない、を仕事にしてみたら

1. 国際協力の事業の進め方
2. 日本のODAの課題
3. NGOとJICAの違い
4. アクションプラン

メンバー
・相原莉流
・武田悠海
・福田彩乃
・オスタージョリオ
・鈴木ひとみ
・田所彩紗

PDCAサイクルとは？

・PDCAサイクル：
Plan 計画
Do 実行
Check 評価
Action 改善

現場でのPDCAサイクル ～ベトナムでの高等教育支援～

目標：優秀なIT人材の育成

Plan：対象地・活動内容・事業費・期間・指標
Do：計画の実施
Check：①対象プログラムの卒業生数
②日本語能力試験合格級別割合
③対象プログラム教員の博士号保有割合
Action：上記の達成率をもとにプログラムを改善

マシュマロチャレンジ

日本のODA（政府開発援助）とは？

- ▶ 円借款
長期・低金利の資金融資のこと。
- ▶ 無償資金協力
開発途上国に資金を贈与すること。
- ▶ 技術協力
日本の知識・技術・経験を活かし、開発途上国に移転し人材の育成を行う。

日本のODAの特徴（教育）

- ▶ 支援先の国の約9割が中所得国のアジア諸国
- ▶ ODAの円借款が大部分の額を占める
- ▶ 社会分野より経済開発分野支援が多い
- ▶ 高等教育への支援 >>> 基礎教育の支援

ODAの課題

- ▶ 高等教育と基礎教育支援のバランス
- ▶ アジアの中所得国への支援だけでなく低所得諸国への支援にも力を
- ▶ 日本のODAの教育支援に当てる資金が少ない
(経済分野：39.9% 教育分野：1.9%)

NGOとJICAの違い

NGOとは？

- ▶ 社会的弱者に寄り添う事業活動
- ▶ 寄付や助成金をもって、世界の問題に取り組む
- ▶ 日本には400団体以上

NGOの仕事：東京での仕事

- ▶ 海外事業
資金調達（公的・民間）、事業運営の後方支援が中心。JICA外務省との交渉、広報、営業力
- ▶ 企画調査担当
事業研究・評価、コンサルティング業務
- ▶ ネットワークング
政策提言、調査提言、NGO職員研修
- ▶ 緊急救援事業担当
国内外での災害時救援活動など

JICAとは？

- ▶ 規模が大きく、国レベルでの事業も多い
- ▶ 外務省からの資金で様々な事業や活動を行う
- ▶ 事業の計画や調整を主に行う



NGOなどが行う基礎教育支援 JICAが行っている高等教育支援

NGOとJICA,働くなら？

- ▶ NGO:自由に事業を行ったり、政府への働きかけをしたい人に向いている
- ▶ JICA:大規模な事業に取り組みたい人に向いている

国際協力の中で、自己矛盾はなぜ生まれるのか。

国際協力にはさまざまな形があり、組織の支援の方法やゴールも違うから。

アクションプラン

- 自分がやりたいことを明確にする、世界の問題に目を向けて自分のできることを考える
- 組織の情報を集める
→組織の特徴・支援の目的や方法
- インターンに参加、ネットワークづくり、JICA PARTNERで情報収集

ありがとうございました

🌐 参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 分科会では、ネットワークがキーワードとしてあげられていたり話を聞かせてもらったので、人と交流する機会に参加して、顔見知り、知り合い、友人を多く持とうと思った。自己矛盾について、僕は実際に現地で携わる仕事をしてその成果を身近に感じたいと思っているので、そういった国際協力の仕事ができる機関を探そうと思った。
- 将来のイメージが浮かばずになんとか受けようと思ったキャリア教育合宿だったが国際協力事業に再びあこがれてそういった将来も良いと思った。解子先生は熱心に一人ひとりの質問や疑問、将来の話の相談にのってくれて、キャリアを多く積んでいる立場からアドバイスを受けられてとても自分達のためになった。
- 今回の研修を通して自分の価値観にあった職業に就くことの重要性に気づかされた。私は将来難民支援政策の分野で働きたいと考えているが、国際協力や難民支援の分野の中でも、NGO や JICA、国際機関など様々な選択肢があるので、その中から自分の価値観に合った仕事に就くことが「自己矛盾がない」という点で重要であると分科会を通して学んだ。



- 疑問に思ったことを積極的に質問できるような主体性を身につける必要があると感じた。
- 自分がやりたいことに応じて仕事を変えていくということ、現状維持にこだわるより自分の価値観や問題意識に合ったところで働くことが人生を幸せにする一つの方法であることを学んだ。
- 世界をよりよくしたいという意図は同じでも、国際協力には様々な形があり、目標やゴールが違うということ。それが時に自己矛盾を生むことを学んだ。
- 今後の課題として、院進学、学生のうちに多くのボランティア経験を積むこと。自分の価値観に合った会社・企業のインターンシップに出向くこと。海外経験を積むため、留学も視野に入れること。キャリア形成を考えるうえで、分科会は本当に参考になった。
- プレゼンテーションをつくる過程で、ディスカッションでどのように発言していくかということ。キャリア形成をしていく中で決断の仕方や考え方、国際協力の様々なファクターや内容を学んだ。
- 自分が後悔なく仕事をしていくために、まず、その仕事について知ることが必要であると思った。
- 分科会学んだこと+ α として、自分がこれからどのようなキャリア選択をしていくかを考えることの重要性を感じた。PDCA など国際協力の分野で行われるアプローチの仕組みは様々なところに発展できる。ODA の問題点や JICA の違いなど非常に勉強になった。(中略)自分が世界の問題に対して、どのような問題意識をもち、課題の解決に向けてどのようにアプローチしたいかを考え、職業の様々な選択肢の中から、自分に適したものを見つけるために情報を集めたり、実際に働いている人と会ったり、インターンに参加したりするなど、キャリア形成に向けて行動してみようと思う。
- 私はアマゾンの熱帯雨林の伐採や地球温暖化による様々な問題のニュースを日々関心をもって聞いている。具体的に個人としてアプローチできる方法は少ないが、私はグリーンピースなどのボランティア団体の活動に参加してみて、何ができるか、どのように支援、改善していけばよいか学び、企業に就職した後も、その知識を生かせるような、学生にしかできないことを積極的に行っていきたい。
- 今回私たちの分科会は6人という他のグループに比べると少ない人数でしたが、その分深く意見を伝え合うことができました。どのように発表したら皆にわかりやすく伝わるか、理解してもらえるにはどうしたら良いかを考えて、グループの人たちと話し合いながら完成まで持っていくことができたので、良かったです。仕事を選ぶ際に、自己矛盾が起こってしまうかもしれないという話を聞き、そこから今の私たちにできることは何かというところまで、議論を進められました。



分科会 C



国際協力とキャリア： 多様な生き方と無限の可能性

飯塚 明子（いづか あきこ）

宇都宮大学 留学生・国際交流センター 助教

略 歴：

兵庫県姫路市出身。米国の大学で経済学を勉強した後、インドの NGO での 3 か月のインターンシップを経て、神戸の NPO 法人 CODE 海外災害援助市民センターに勤務し、海外の災害復興支援に従事。オランダの大学院で国際協力を学び、NGO や国連勤務を経て、ベトナムに 3 年間駐在し、コミュニティー防災事業に従事。その後京都大学で地球環境学博士を取得し、日本の NGO のスリランカ事務所長として防災分野の官民連携事業を運営。2017 年 4 月から宇都宮大学留学生・国際交流センターに勤務。2 児の母。

🌐 講義の概要

1. 仕事の内容・研究テーマ

2017 年 4 月から宇都宮大学で働き始めて 2 年半。主に以下の仕事に従事。

・留学や国際交流に関する業務

海外留学や国際インターンシップについて興味のある日本人学生や留学生の相談にのり、留学生・国際交流課と説明会等を行う。また大学の国際化を推進するために、国内外の留学フェアや会合に出席したり、国際インターンシップの派遣先や協定校を開拓。

これまでの海外経験から、留学に興味のある日本人学生や外国人留学生の気持ち（不安や期待）に共感でき、自分の時を思い出したり、（時代は変わっているので）自分の留学時代との違いに驚きながら仕事している。特に海外から成長して帰ってくる日本人の学生や、宇大で充実した学生生活を送っている留学生を見るととてもやりがいを感じる。



・災害とコミュニティに関する講義や、留学生向けの講義を担当

宇大で働き始めて 3 年目に入り、基盤教育科目や全学科目で災害とコミュニティに関する講義を担当。また国際学部の専門科目や大学院では、災害と国際協力に関する講義を担当。そのうち 2 つの講義「Risk management」と「Disaster Studies」は英語で開講。人前で話をするのはとても苦手で緊張するので、授業の前はいつもそわそわして、終わるとほっとする。英語の授業の方がリラックスして自分らしく表現できることを実感。

・コミュニティ防災や国際協力に関する調査研究

国内外の被災地におけるコミュニティを核とした防災活動（郷土芸能と災害復興、防災教育、ボランティア等）をテーマに研究。また海外の被災地におけるマルチアクター（政府、NGO、国際機関等）による国際協力支援も調査している。自分の興味のあるテーマを深く調査し、論文や発表を通じて公開するというのは、これまで仕事ではあまりなかったため、とても新鮮に感じる一方で、研究費や研究時間の確保、知識や経験の不足、論文を投稿してもなかなか出版が決まらない等、悩みも尽きない。

2. キャリアパス

[～20 代] 兵庫県姫路市出身、高校まで姫路。高校は成績不良で、バトン部、バンド活動、アルバイトに打ち込む。

[～25歳] アメリカとオランダに留学、インドのNGOで海外インターンシップ。友人の誘いで神戸のNGOで翻訳のボランティアをしたことがきっかけで、海外の災害復興支援のNGOで働き始める。NGOでの仕事は海外（スリランカ、アフガニスタン、イラン等）の被災地復興支援事業の運営、日本での事業報告会、講演、会報誌の執筆、理事会運営、支援者やボランティア、メディア、教育機関等との連絡調整等多岐にわたった。初めての仕事で学ぶことが多く、とても充実した日々を過ごし、その後のキャリアの基礎が築かれた時期。

[～30歳] 日本から出張ベースで海外事業を運営するのではなく、海外に駐在して事業に専念したいという思いから転職し、京都大学の研究員としてベトナムに赴任し、国際協力機構（JICA）のコミュニティ防災事業に3年間従事。毎週、山間部、平野部、海岸部の事業地に行き、住民の方からお話を聞きながら、ベトナムの研究者と事業を運営。現地の人々のニーズを踏まえて、防災だけではなく、栽培、養殖、教育、建築、文化、生活習慣等の活動も実施し、多国籍、他分野の研究者と協力して事業を実施する醍醐味を実感。

[～35歳] 結婚。ベトナムで一緒に事業をしてきた大学の先生のすすめで1年間の博士課程に入り博士号を取得。長男を出産。パートナーの仕事に伴い、大学を辞めて家族でスリランカに移住。次男を出産。スリランカ駐在の4年間のうち、最後の2年はスリランカにある日本のNGOの官民連携事業に従事。国レベルの防災プラットフォームを構築する仕事を現地NGOと協力して行う。スリランカでヨガインストラクターの資格を取得。

[35歳～] 現地NGOに事業を引き継ぎ、日本に帰国。留学や仕事で15年海外に住み、海外の現場で働き続けたい思いはあったが、日本国内の課題や日本の被災地についても関わっていきたくて、日本に生活基盤を移し、宇大で働き始める。また海外で様々な立場から防災に関わってきた過程で、コミュニティを核とした防災の必要性を強く感じ、現在の研究や教育に至る。宇都宮で運転免許を取得。

[40歳～] 宇大での仕事や宇都宮での生活に慣れ（運転以外）、現在長男は小学3年生、次男は1年生。今年9月からアメリカ、ボストンの大学で半年間研究留学。

3. 分科会の内容

世界中で発生している貧困や災害といった課題は、その地域の人々だけで解決するのは難しく、他の国や地域の人々の協力が不可欠です。この分科会では、国際協力に関わる多様なアクターとその役割を解説し、講師がこれまで実践してきた海外事業を紹介しながら、国際協力に必要なことや、どのように関わっていくかについて一緒に考えます。国際協力や防災をキャリアとしたい人もそうでない人も役に立つ内容なので主体的に学ぶことをお勧めします。

[分科会 1]

- ・アイスブレイキング（自己紹介）と導入講義「東日本大震災と海外からの支援」

[分科会 2&3]

- ・各自調べてきた国際協力のアクターについて発表
- ・国際協力とそのアクター（NGO、国連機関、政府機関、教育機関、企業、メディア、ボランティア、市民社会等）の解説
- ・国際協力の実践事例の紹介
- ・多文化共生ワークショップ：日本でできることは？
- ・国際協力ワークショップ：アクターを演じてみよう
- ・国際協力と無限の可能性：どのように関わっていくか？



4. キーワードリスト

- 国際協力
- NGO
- 国際連合
- ODA
- ボランティア
- SDGs



5. 予習用課題

上記のアクターのうち、最も興味のある国際協力のアクターを調べて、分科会で活動内容や役割等を5分程度で発表してください。

参加者による全体発表

国際キャリア教育プログラム

全体発表

分科会C

宮田望 HOANG THI NGOC HUYEN 中倉桜都 戸星七海
金谷駿 和泉朱香 石川咲季 大中健太郎 藤原七海 竹田侑海

目次

- 学んだこと
- 具体的なプロジェクト
- まとめ

学んだこと①

- 相手のニーズに応えた支援を行う（文化背景、環境、気候、宗教など）

学んだこと②

- 誰もが支援する側される側 = 誰もが災害弱者になり得る
- 東日本大震災の際
当時の国連加盟国は192ヶ国
日本に支援を申し出たのは163の国や地域
アメリカ、中国、フランスなどの先進国のほか
アフガニスタン 100万米ドル（約8000万円）
ツバル 1万8000豪ドル（約150万円）

★出典：国連人道問題調整事務所（2011年4月26日現在）

学んだこと③

NGO、国連、政府、企業などが連携することによりお互いの強みを活かし、弱みを補完する

事例：Japan Platform (JPF)

アクター	主な強み	目的	強み	弱み
44 NGOs	・災害や紛争で被害に遭った人々への支援	・ NGOにより目的は異なる（人道目的、子供の支援、緊急医療など）	・ 機動力 ・ ローカルネットワーク ・ 専門性	・ 不十分な財政基盤
政府	・ 支援金提供 ・ 物資、サービス、人材の提供	・ 外交 ・ ODAの効果やアカウンタビリティ、透明性	・ ODAによる資金力 ・ 備蓄	・ 機動力 ・ 外交上の障壁
ビジネス（民間企業）	・ 支援金提供 ・ 物資、サービス、人材の提供	・ 社会貢献 ・ サービスや商品の提供	・ 資金力 ・ 物資	・ 途上国支援の経験やネットワークがない ・ 人材不足

状況設定

- ・ 私たちは大学生
- ・ スタディーツアーで東南アジアのB国のA村を訪問した。
- ・ A村は100世帯500人が住み、人々は主に農業に従事している。
- ・ スタディーツアーで、厳しい環境の中で生活する子供達に感銘を受けた。
- ・ 日本に帰国後、A村の子供達を支援するために友人とサークルを作った。
- ・ その2年後。。。

A村で洪水発生

- ・ 2018年11月1日、A村で大雨による大洪水が発生。
- ・ 洪水で財産やインフラなど、大きな被害を受けた。
- ・ A村は毎年雨季の時期に洪水が発生するが、今年の洪水は例年以上の想定外の規模だった。
- ・ 近隣の村々も被災し、自治体も機能していない。

プロジェクト立案

- ・ 2018年11月10日、私たちのサークルは、洪水で被災したA村を支援することにした

→どのような支援をするのか

ついて学んだうえで、group で実際にプロジェクトを作ることでもできた。この流れで、初日は国際協力の表面しか知らなかったが、3日間だけで、災害援助のプロジェクトまで体験できた。その中で、一番難しいところは、アクションプランでプロジェクトを作ること。分科会では、学生レベルのプロジェクトだけでも様々な問題が発生したので、大規模なレベルだと、専門家や国際協力のアクターの協力が不可欠だと思う。多様性を学んだほか、グループワークを通して、今後のキャリアに必要な資質が少しだが身についたと思う。また、母語以外の言語できちんとコミュニケーションをとり、周囲と協力することができた。

- プロジェクトを考えたいのに、将来のキャリア形成に必要なことを考えるきっかけになったと思う。まず、課題発見、解決していく力。問題を自分で気づくことから、課題に対応することができるまで、やはり、学生のうちにしっかり基礎的な知識を学ぶべき。また、分科会で作ったプロジェクトを実行できるかどうか大きな違いである。確実に実行するため、一人では人手不足なので、そこで社会や対人関係を築くことが、必ず必要だと思う。身近なコミュニケーションで相手の話をしっかり聞き、何を伝えたいのか、理解する力を高めたい。自分の人生と真剣に向き合って、自分の好きなことを見つけ出すことでモチベーションが上がると思う。今すぐに好きなことがわからなくても、まずやりたいことをやってみて、自分の可能性を知る。そういった学生時代になるように過ごしたい。
- この分科会に参加して、国際協力に興味を持つようになったので、これからの授業にそのような分野の授業を取り入れていこうと思っている。しかし、幅広く物事を見ていくことの重要性も学んだうえで、一つに絞らず、まだ多くの知識を取り入れようと努力していきたい。そしてゆくゆくは自分のなりたい職を見つけていけたらよいと思う。お金も大切だが、目的をもってモチベーションが続く仕事を見つけることが今の私の理想。また、選択肢は多くあるので、一つの職業に縛られることはないということをお頭において、柔軟な思考を持って、キャリア形成をしていきたいと考えているが、そのような考えを持つことは決して簡単なことではないので、たくさんの挑戦、失敗、経験をしていきたい。そのためには、勇気をもって行動にうつせる人になりたいと考えている。
- 国際協力の分野でも特に「災害支援」という分野について深く学ぶことができた。今まで、大学の授業では紛争や戦争によって生じた被害に対する国際社会の支援について学んできたため、自分にとって新しい分野を知ることができた。災害支援のプランを実際に考えるうえで常に気を配らなければならないのは、「相手のニーズに応える」ことである。災害が起こった時期や地域、人々の文化を考慮しなければ、本当に必要とされている支援はできない。またこれまで日本はいつも支援する側にあると思っていたが、3.11の時には多くの国から支援を受け、その中には発展途上国も含まれていた。やはり国際支援は一方通行的なものではなく、常に相互に支えあって成り立つものであると実感した。また、自分の将来についても考えるよい機会となった。すべての講師の先生方の話を聞いて共通して感じたことは、自分の中にぶれない何かをもっていらっしやっただということである。私もそれを見つけることができるように、これから学んでいきたい。
- 国際協力に関する様々なアクターを知ることができたのはとても良かった。将来働きたい業種を自分で狭くしていたことが分かり、様々な業種を検討したいと思った。
- 分科会のテーマである国際協力について一番学んだことは、「相手のニーズに応える」ということだ。支援する側の都合で支援してしまわないよう注意しなければならない。これは、分科会で実際に支援プロジェクトを考えるなかで、「これをもらったら相手は助かるか？困らないか？」など、指摘されて初めて気づいたもので、簡単ではないと感じた。国際協力として支援することになったら、「相手のニーズ」を第一に考えるようにする。また、ひとつのトピックに対しても、人によって着眼点、解釈が違うことに面白さを感じたとともに、相違した意見の許容、尊重といったものの大切さに気づくことができた。今後の人生で人と意見がぶつかる機会は確実にあるので、今回の経験を生かして、良い議論をし、良いものを作りだせたらよいと思う。
- 分科会を通して、国際協力の知識が深まったのはもちろん、問題を考え解決していく道筋を学びました。(中略)このセミナーは、先生から学んだことをうけ、そこから班のメンバーと話し合い、自分たちで考え、結論を導き出す形式だったので、普段はあまり経験することのない学生が主体の授業を行え、自分が参加しているという実感もあり、意欲的に取り組むことができました。
- 国際協力というものに参加したいという気持ちはありましたが、具体的にはどのような支援をしたら良いか、そもそもどの分野に興味があるのかも自分でわかっていませんでした。そのため、概要に「国際協力」と書いてあった分科会に参加しました。(中略)このセミナーを通して、国際協力のアクターは

とても多く存在していることも知りました。今までに何に関わりたいかはっきりしていませんでしたが、私は途上国にいる子どもが紛争などに巻き込まれず、平和に暮らせるような支援に関わりたと思いました。国際協力の難しさ、考えるべきことを学んだので、そのような点を活かして私も今後役にたいたと思いました。(中略) 具体的には、途上国で暮らす子どもたちが、平和に暮らせるようになる為の支援をしたいと思っています。例でいうと、きれいな水を得られない人々への衛生を整え、幼いうちに病気で亡くなる子どもを減らしたり、紛争や家事労働を原因に十分な教育を受けることができない子どもに教育を与える支援をしたいと思っています。それが実際に行える国際協力のアクターはまだ調べていないのでこれから少しずつ調べて自分に見合うものを見つけたいです。そしてアクションプランで学んだ企画の難しさや考慮すべき点を踏まえて、積極的に関わりたいと思いました。そのためには、子どもへの支援を必要としている地域を調べ、そこから問題点を見つけ、最適な解決策を考えたいです。今のところは国内から現地への支援を行える事業が良いと考えています。国際協力を通して、自分も世界へ目を向けて意識を変えたいと思います。

- もともと国際協力に関わるような職につきたいという希望はなく、自分のキャリア形成に少しでも生かせることがあればと思って合宿に参加したが、さまざまな国際協力アクターについて学び、議論したことで、関わりたいという思いが生じた。直接 NGO に入るまではしないにしろ、それぞれのアクターの行っている活動、例えば、募金などは協力できるのではないかと考えた。全体講義も踏まえると、将来はやはり自分が興味関心のあることに専念することが一番であり、大学時代からでも始められるものと思った。今は興味のある分野についての本を沢山読みたい。そして所属する国際協力サークルの活動で支援される側のニーズを意識していこうと思った。実際 2 月には支援先の農村へ研修に行くので、現状や人々の心情を理解し、コミュニケーションが取れるようにまずは少しでもその国の言語を覚えたい。



分科会 D



超高齢社会を考える

佐藤 栄治 (さとう えいじ)

宇都宮大学

地域デザイン科学部建築都市デザイン学科・准教授

略 歴：

1976年生まれ。厚生労働省国立保健医療科学院を経て、2010年より現職。専門は、都市計画、医療・福祉（介護、保育、障害など）政策支援。近年では、医療計画策定に向けた基礎研究、地方都市における医療・介護の連携のあり方、公共施設のマネジメント手法等、国、県、地方自治体との実践的な研究に取り組んでいる。

 講義の概要

1. 仕事の内容・研究テーマ

私はこれまで、都市や建築の諸問題を利用者や居住者の視点から捉え、その解決策を探る研究を行ってきました。特に最近では、生活のうえでさまざまな支援や配慮を必要とする、高齢者や障害者、こども、こどもを抱える就業者を対象に分析・研究を行うことで、あらゆる人にとって使いやすい都市や生活環境について考えています。研究の中では、実現可能な計画や施策策定の手段として各種統計情報や統計を地理的に表現できる地理情報システムや、ある側面から事象の理想像を示す理論モデルを用い、計画や政策の背景や数値の算出根拠を示しています。主として以下の研究を行いました。



(1) 都市における高齢者の生活を想定した理論的なアクセシビリティ指標の開発

本研究は、郊外の集合住宅群や地方都市において、今後激増する高齢者の生活を徒歩による移動により担保しようとした一連の研究です。徒歩による移動には、対象地域の地形の状況、集合住宅の階段の有無、面的に広がった生活圏など、移動に際しての物理的な抵抗を指標化し、その困難さを露呈させています。有効性の確認された指標を用い生活利便性の低い地区を抽出し、それらの地区での生活手法や住み替えの提案を行いました。

(2) 高齢者サービスの整備方針に関する研究

近年の介護施策の方針では、地域包括ケアシステムや介護サービス付き高齢者向け住宅等の整備が進み、地域での生活継続を担保するシステムの構築が急務とされています。国、都道府県、市区町村のそれぞれのレベルでの介護計画指針、地域包括ケアの捉え方が検討され、各自治体において具体的な制度設計が望まれています。現在、自治体と連携し研究成果を実際の計画に反映しつつ、さらなる研究の深化を試みています。

(3) 医療施設配置計画、医療サービス提供体制の再構築に関する研究

近年の日本においては、人口減少や地域の縮退等を背景として、地域医療体制の再構築が求められています。人口減少に連動して社会的共通資本の総量が減少する社会においては、医療サービスの提供にその効率性や公平性も求められています。医療サービス提供体制の適正化に向けた知見を得るため、居住者か

ら医療施設へのサービスの到達性を計測することで、医療サービス提供体制の地域の特徴を定量的に明らかにすることを目的とし、提供体制再構築に向けた基礎的分析を試みています。

その他、子育てと就労・職住構造のあり方に関する研究、就学前児童施設や障害児・者サービスのマネジメントに関する研究、等を進めています。最終的には統合的な社会モデル構築（社会的共通資本のあり方）に向けた複雑系の社会分析を進めていきたいと思います。

2. キャリアパス

私は宇都宮大学工学部建設学科を卒業した後、東京都立大学大学院・工学研究科建築学専攻・修士課程・博士課程（現、首都大学東京）と進学しています。進学を決めたのは、もっと世の中の仕組みを知りたい、世の中の問題を解決する仕組みを知りたい、という知的好奇心からだったと思います。実際、修士課程を修了する時に企業の内定をもらっていましたが、知的好奇心が勝り博士課程に進学しました。専攻した都市計画・空間情報科学分野は、社会問題を数理的に解く研究が主流です。様々な問題解決手法（分析、解析、数理モデル、統計処理、大容量データの分析、シミュレーション手法など）を、学生の間に学びました。大学院修了後は、学術振興会の研究員（高齢者の生活基盤整備の研究）、明星大学アジア環境研究センターの研究員（タイの農業・都市政策）、厚生労働省の研究員（子育てと就労に関する研究、介護政策に関する基礎研究、医療サービスの公平性に関する研究など）を経て、現在の宇都宮大学で教員をしています。

一見バラバラに見えるキャリアですが、社会問題を解く、またその解法から導きだせる将来像を明示する、という、自身の知的好奇心を掻き立てた事柄からは逸れていません。それらを社会に役立てることのできる場所に異動していったと思います。

3. 分科会の内容

【テーマの概要】

日本の超高齢社会化は世界一進んでいるとされ、日本が抱える社会問題は、今後超高齢社会を迎える国々から注視されています。本分科会では、超高齢社会の現状を知ると共に、国際的な社会的共通資本（医療・介護）のあり方について多文化共生の観点から議論します。

【テーマの背景にある問題意識】

超高齢社会の背景には、それぞれの国の社会保障制度、憲法、そして大きくは倫理観が関連してきます。それらの全てを分科会で説明するには時間が足りなく、断片的な情報の提供となりますが、皆さんの興味に合わせ背景を説明していきます。

【分科会の進め方】

以下の内容を想定していますが、興味、進度によって調整していきます。

- 1) 超高齢社会の現状のレクチャー
- 2) グループでの検討の上、超高齢社会を議論する論点の整理
- 3) 設定した論点についての情報収集、分析（web等を利用）、課題解決方法の議論
- 4) 個人や組織、国単位でのアクションプランの設定
 スペシャリスト、ゼネラリスト、（各自の）専門分野名

4. キーワードリスト

- 社会的共通資本
- 超高齢社会
- 医療・介護問題
- 他国での高齢期の過ごし方



5. 参考資料等

- 高齢社会白書、内閣府、<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html>
- 社会的共通資本、宇沢弘文(著)、岩波書店、ISBN-10: 4004306965、ISBN-13: 978-4004306962

死生観

D分科会の全員意見は...

親に対しては

- 本人の思い, 個人の意思
- 延命治療をとめる, しない
- 延命する
- 延命するけど, 親が辛そうなら考える
- 親の判断を聞いていて, それを尊重する (リビング・ウィル)

欧米(特にヨーロッパ)の特徴

- 終末期に高齢者医療がない
- 高齢者施設的环境
- 芸術的な要素を用いたよりよい環境作り (法律: 施工費の8%以上を芸術に充てる)
- 病院的ではない
- 創造的
- カラフル
- 広い, 開放感, 安らげる

イギリス

Hammersmith Bridge Road Surgery



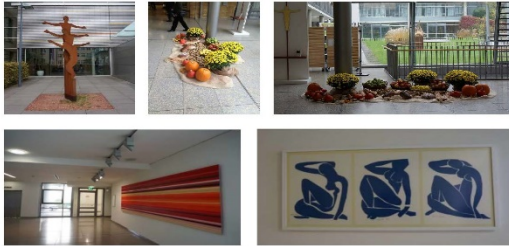
オランダ



ドイツ

Diakonie-Klinikum Stuttgart gGmbH

■アートワーク



イギリス

Maggie's Centre



ドイツ

Schwarzwald-Baar Klinikum
Villingen-Schwenningen GmbH



写真を見て、考えられること:

- 価値観の違いが見られた
- 人間性, 生活感を大切にしている
- 自由度
- 国の規制の違い

欧米の医療システムを導入したい!!

しかし...

- 見習うところはあるけどそのまま導入することは難しい (保険制度, 法律, 概念の違い)
- 日本には外資の医療法人がない

将来的な高齢期の過ごし方

- 地域包括ケアシステムの実現
- AIの活用

<p>地域包括ケアシステムとは？</p> <p>・・・医療・介護に加えて、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくシステム →導入してから3・4年経ったけれど、上手く機能していない</p> <p>成功するためには？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口規模とケアをする／される側のバランス ・財源 	<p>問題と解決策</p> <p>①ボランティアや自治会を、システムに有償で組み込むことは正しいのか？ →海外では無償のボランティアが習慣的（日本人：お金を貰うことによる責任感・性に合う）</p> <p>②財源の不平等 →地域を超えた連携が必要</p> <p>③居住場所の違いによるサービスの格差 →住む場所を限定する</p>
<p>AIの活用</p> <p>《家事の役割分担と機械・ロボットの利用可能性に関するアンケート調査》によって、家事を支援するAI(遠隔操作)については約70%が賛成(ケアをする／される側の両者)</p> <p>■機械やロボットに、自分の代わりに、家事を任せたい(家事の代替) ■機械やロボットに、自分が行う家事を多くしてもらいたい(家事の補助) ■機械やロボットに、家事を一切してもらいたくない(ほい)</p> <p>https://japanzinet.com/article/35087890/5/ ニュースより</p>	<p>AIとロボットを用いた生活、介護</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身体能力(歩行、力仕事等)の補助 ・ドローンによる運搬 ・遠隔監視(ビデオ通話、リズムセンサー:現状でもある) ・自動運転 ・認知症予防、介護予防 ・健康状態(生活習慣、バイオリズム)の管理
<p>全体を通して今後の日本に導入したいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外の施設のスタイルとデザイン(居場所) ・人間性を重視できる環境づくり(意識) ・選択肢の多様性(制度) 	<p>ご静聴ありがとうございました</p>

参加者のレポートより (コメントは原文のまま記載しています。)

- 保健師としても看護師としても、リビングウィルや高齢者への援助に関する認識を高めることは重要であり、大学生よりももっと幼い子でも理解できる内容にして、伝える工夫などほしい。ボランティアのサークルに入っているの、そこでの活動や同じサークル、大学の子にも今日の研修で学んだことを伝えたい。保健師を目指しているが、幅広い仕事内容それぞれへの理解がまだない。超高齢社会について学んだことを深めたり、他の仕事内容も1つ1つ理解を深めていきたい。保健師、看護師だけに定めるのではなく、経験を積んだ後、それを活用して他の仕事に就くことも良いと考えたので、目の前のことだけでなく、常に広い視野を持って生活していきたい超高齢社会についての知識、言葉としては知っていたけど、曖昧で、そこまで他の分野にまで広がると思っていなかった。選択肢の多様性。全体会で重田先生が言っていたように、1つの分野ではなく、いくつもの分野を取り入れた複眼的な視点が大事だと思った。
- 超高齢社会を考えていく中で、いろいろな分野とつながりがあり、かつ深いと思った。そしてどうしても今のシステムでは足りない部分があり、他でカバーしていかなくてはいけないと思った。
- 超高齢社会、人口減少になっていく今後は、どのような人材が活躍していくのか。社会の分析や求められていることを明らかにしていくことに面白みを感じる。
- 今回の研修で超高齢社会について学ぶことができた。日本が超高齢社会であることは知っていたが、実際の数値、具体的な現状、これからの予測については初めて知ったので改めて問題の深刻さを感じた。また、超高齢社会を調べることを通じて1番学びが大きかったことは海外と比較することである。今まで日本の枠の中でしか状況を見ていなかったの、海外と比較することで建物の違いや法律や制度の違い、倫理観、社会的背景の違いなど様々な気づきや発見があった。私自身、海外の医療制度を日本に導入しようと試みることはすごく良いと思った。しかし、システムをそのまま導入できないこと、資金が少ないことなど課題も見

つかった。その中でもグループなりに私たちに何ができるかを考えまとめることができた。分科会を通して、コミュニケーション力や協調性、考察力などを身につけることができた。

- 最初、第三希望の分科会になってしまい不安だったが、今まで自分が調べたことのないテーマだったので新しい発見や学びがたくさんあって面白かった。違う大学の人もいるなか、様々な考えや意見を持つ人と交流して、自分の中に足りないものや他者からの学びもあった。今回学んだテーマ、他の分科会のテーマはもちろん、考え方や学び方もこれからのキャリア形成に生かしていきたい。3日間、仲間と一緒にテーマについて奥深く調べ充実していて達成感で一杯である。この意欲とやりがいもこれからの大学生活で役立てていきたい
- 日本の超高齢社会の尊厳死について学んだ。
- 批判的に物事を見る姿勢を得ることができた。
- 超高齢社会についての知識、言葉としては知っていたけど、曖昧で、そこまで他の分野にまで広がるとは思っていなかった。選択肢の多様性。全体会で重田先生が言っていたように、1つの分野ではなく、いくつもの分野を取り入れた複眼的な視点が大事だと思った。超高齢社会の現状だけでなく、佐藤先生の仕事に関わる多様な施設や仕事を知ることができた。また、他の分科会の発表を聞き、浅くではあるけれど、多くの事柄に触れることができた。今すぐではなくても、今後より深く学ぶ機会があった時に参考にしたい。保健師になった時に何をすべきかを考えられるよう、今後の大学での学習を含めて、超高齢社会についての学びを深めたい。学ぶ際に、看護の視点だけでなく、他国と比較したり、施設の造りまで注目する、AIなどの機械の活用を考えるなど、幅広い分野の視点を忘れずに学びたい。他の科目の研修では、初対面で専門の違う学生との話し合いやまとめをうまくできなかったが、その失敗や今日の研修の場を活用し、実のある3日間となった。専門の道に進んだら、その道だけだと思っていたが、佐藤先生の仕事についての話を聞き、学びは1つの分野では完結できないのだと知った。
- 今回は分科会Dに参加し、地域デザイン科学部の佐藤先生から講義をして頂きました。国際学部以外の先生から教えて頂くのはまた違った面白さがありました。今回のお話では建築から高齢者の生き方、また人生の終え方をデザインするというのを学びました。そこから、高齢者に関わるという仕事、またボランティアなどに関わってみたいと思うようになりました。日本の現状と海外のデザインや取り組みを比較することができました。話し合いでは、積極的に意見を出すことができました。人前でしゃべることはとても苦手でしたが、大学、出身、性別、年齢の様々な人たちと話していくうちに自分の考えを表現することができるようになりました。パワーポイントを作ることもたくさんのトラブルやミスがありました。みんなで協力してカバーし合うことができました。全体発表では、自分があまり興味のない分野のことも楽しく学ぶことができました。この合宿で学んだ知識や経験をキャリアについて考えていくうえで活かしていきたいです。
- 今後は、社会全体のサービスや政策、取り組みなどが高齢者向けのものになっていく。社会がデザインされていく中で、高齢者に優しい、また高齢者がより輝ける場所づくりは今後の課題となっていく。自分はまだ国内で就職するか、海外で就職するかは決まっていないが、どちらにしてもこのような社会問題について勉強していくことは知識として大切になってくるだろう。また、分科会の内容に関しては、高齢者の終末期における自己決定権が課題としてある。現在の日本ではベッドに寝たきりの老人がたくさんいて、それが幸せと言えるのか？という疑問がたびたび上がる。そこで、ヨーロッパで既に導入されている安楽死のシステムを日本でも取り入れることを提案する。しかし、倫理の問題もあり非常に難しい事象になるだろう。今回の合宿では、まったく新しい知識を身につけ、そこから自分の考えを作り出していくという訓練ができた。グループの人たちと意見を出し合ってスライドを固めることができたが、もう少し自分の意見をしっかり持つことが課題だと思った。



分科会 E



いくつもの日本 ～アイヌ民族から考える多文化共生～

廣瀬 隆人(ひろせ たかひと)

宇都宮大学 地域創生推進機構 コーディネーター

略 歴：

北海道白老町出身。北海道で高校教員、北海道教育庁文化課勤務を経て、国立教育会館社会教育研修所(現在の国立教育政策研究所)勤務。2000年～2015年まで宇都宮大学教授。専門は成人教育学、ノンフォーマル教育、人権教育、地域づくりなど。現在は、栃木県人権施策推進審議会会長、団体役員など。

🌐 講義の概要

1. 仕事の内容・研究テーマ

週4日は、宇都宮大学地域創生推進機構でUUカレッジ担当のコーディネーターとして勤務。主として社会人に大学の授業を公開し、受講者を支援する仕事をしている。

週末や休日は、6つの団体の役員をしているので、その活動に力を注いでいる。団体は、一般社団法人とちぎ市民協働研究会、認定NPO法人とちぎボランティアネットワーク、NPO法人とちぎ協働デザインリーグ、NPO法人かぬま教育支援ネットワーク薬、NPO法人プロジェクト宙、社会福祉法人蓬愛会などである。この他に、山形県南陽市、日光市大沢地区などで青年団の育成に携わっている。公民館、青年団といったレトロな社会教育に強い関心がある。又、鹿沼市で毎年3月に開催している「子どもまち ミニかぬま」の実行委員長をつとめている。



2. キャリアパス

北海道白老町に生まれた。周囲にはたくさんのアイヌの人々が住んでいた。子どもの頃なので記憶はない。その後、苫小牧市、夕張市、静内町、札幌市など転々とした。

大学を卒業後、北海道のオホーツク沿岸の町で高校教師として働いていた。主に日本史を教えていた。大学生の頃から「地元、地域」という言葉に強いこだわりがあった。高校生に地元のことを教えることに使命感を感じ、地元の埋蔵文化財、アイヌ語地名、歴史の教材をつくり、生徒に地元で生きることの意味を問いかけてきた。ややこしい教師だったのだ。地元の山や川の名前(アイヌ語)を定期テストに出題した。しかし、生徒はそもそも地元に関心がなく、誇りが持てないのだ。「何もないまち」という強い刷り込みが生徒の心を支配していた。当時の北海道では、「開拓の歴史」という印象が強く、アイヌ民族の歴史や文化は、生徒の歴史意識の中に存在していなかった。人権感覚や多文化共生などという発想は脆弱なものであった。地元には長い歴史とアイヌ文化があることを伝えようと地元を発掘調査を誘致したり、生徒とともに地元のことを調べる日々が続いた。その中で地元のアイヌ語地名の調査を始めて、地名解釈の本を出版した。その中で多くの住民に聴き取り、教えを請うてきた。地域住民という「成人」に出会うことになる。高校教師をしていいため、出会う大人のほとんどは保護者。それ以外の成人との出会いはインパクトが大きかった。のちに成人教育学研究に向かうことになる。

そんな活動をしていたため、当然職場では浮き、変人扱いだった。社会教育の道にという誘いがあり、その後は、北海道立砂川少年自然の家、北海道教育庁文化課などに勤務することになった。そこで高等学校のアイヌ民族に関する指導資料の作成に係わることになる。会議の中では何度もアイヌの人たちとの摺

り合わせを行い、合意を得ながら進めることになった。その後、文科省に出向を命じられて、上野公園にある社会教育研修所に勤務することになった。働きながら夜間の大学院に通い、成人教育学を学んだ。研修所の仕事で平沢安政先生の人権の講義に強い衝撃を受けることになる。アイヌに係わりながら、自分の人権感覚の未熟さに茫然とすることになった。多文化共生の課題は自分の中にあったのだ。その後、2000年に宇都宮大学に着任。

3. 分科会の内容

分科会では、

日本列島には古くからアイヌの人々が住んでいた。本州以南で暮らしてきた人たちとは異なった北の風土に根ざした豊かな文化を今に伝えている。しかし、アイヌ文化は研究が進展しておらず、未だにわかっていないことが多い。「日本文化とは何か」を考えると、アイヌ文化を抜きに語ることはできない。日本国内には、他にも多くの異なる歴史や文化を持つ人々が共に暮らしているのだ。今後は多くの外国人労働者が日本社会で生きていく。「異なる」ことや「多様」であることを社会の価値ととらえて、多文化共生を検討していきたい。

参加者がそれぞれの経験を語り合い、自分の人権感覚と向き合う時間にしたい。それぞれの日本、いくつもの日本がそこに立ち上がってくる。そのことに気づく時間を持ちましょう。

(0)内なる多文化、異文化経験を語る(アイスブレイク)

- (1)アイヌ文化を知る(歴史と文化)
- (2)アイヌ文化の特性を理解する(歴史と文化)
- (3)多民族国家としての日本(多文化と人権)
- (4)アイヌ差別をめぐって(多文化と人権)



4. キーワードリスト

- アイヌ民族
- ウイルタ
- アイヌ文化振興法
- 多文化共生
- 人権



5. 参考資料等

- ①中川裕監修『楽しい調べ学習シリーズ アイヌ文化の大研究』PHP 研究所 2018年 3,000円
 - ②加藤・若園『いま学ぶ アイヌ民族の歴史』山川出版社 2018年 2,000円
 - ③坂田美奈子『先住民アイヌはどんな歴史を歩んできたか』清水書院 2018年 1,000円
 - ④角田陽一『図解 アイヌ』新紀元社 2018年 1,360円
 - ⑤北原・簗島『アイヌ もっと知りたいくらしや歴史』岩崎書店 2018年 3,000円
 - ⑥中川裕『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』集英社新書 2019年 972円
- (①⑤は、児童向けの絵本、②は一般向け・高校用の指導資料、③④⑥は一般向け)

6. 事前予習用リーディング課題

次のうち、いずれかを選択してください。

- (1)『ゴールデンカムイ』の漫画本又はその映像をみること。
- (2)上記の参考文献のうちいずれか1つを読んでおくこと。(貸出し用に各一冊は用意してあります)



参加者による全体発表

アイヌ民族
から考える多文化共生

分科会E
メンバー：有我紗耶香 伊藤羽美 影山実悠 齊藤涼 酒井美音
鈴木香奈 須永若菜 高橋歩夢 平内真世 松崎夏美

学んだこと①
アイヌについて北海道だけでは
なく日本全体で考える
べき！



学んだこと②
前提やこれまでの価値観にとら
われていると物事の本質が見え
ない！

アイヌと聞いて思い浮かぶものは何ですか？

私達の以前の
イメージ

エスキモー 狩猟
戦い

相手を良く知らないことが

差別

につながる！...かも

和人（アイヌ民族から見た日本人の呼び方）
目線

和人 > アイヌ
優れている 劣っている
優劣をつけるようになった



他人事では済まされない

- 今回セミナーに参加したことで、授業では受けることができなかつた内容を3日間かけてじっくり考えられたことは、自分にとって大きな意味のある分科会になったと思います。第1希望の分科会ではありませんでしたが、なんで第1希望にしていなかつたのだろうかと思ひ、疑問に思ふほど、充実していたし、考えを深める時間を持つことができました。先生のアイヌのことについて生き生きと話す様子を見て、ここまでまるごとを見つけれられたことをとてもうれやましく思ひました。自分もこれからの大学生活で生涯をかけるような興味を持てるものに出会えたらいいなと思ひました。
- 分科会を通してまだまだ知らない事や、自身の凝り固まつた価値観に気づくことができました。よつて、大学生活の中で海外へ出たり自身の活動範囲を広げ、様々な人や価値観に触れ、視野を広げたいと思つた。
- アイヌについての基礎知識と、アイヌが直面する問題について学んだ。多方面から物事を考える力、見る力を得た。
- 今回の合宿では、私はアイヌについて学びました。今までアイヌという言葉は聞いていましたが、無知に近い状態であつたため、この3日間でアイヌの歴史、文化に関する知識をつけたことでアイヌへの興味関心も高まり、アイヌに残る問題は他人事ではいけないと感じました。また、アイヌのことだけではなく私自身のこれからの繋がるものも得ることができました。それは、知ること、経験の量を増やすことの重要性です。この合宿に参加しようとしなかつたなら、私はこの先アイヌのことを無知のまま他人事として扱つていたはずで、さらに、講師や友達からの刺激を受けることもできていなかつたはずで、このように、すぐに役に立つかは分かりませんが、自身の知識を増やすことはこの先の人生で重要になると感じました。そして自ら進んで様々なことを経験しようとする行動力を大学の4年間で大事にしていきたいと思ひました。悩むよりもアクションを起こし、3C精神であるChanceにChallengeしてChangeすることを意識していきたいです。
- 分科会に分かれてから何度もグループ内で意見の衝突が起きました。その時自分は納得がいつていなくても、場の雰囲気壊したくなくて、意見を言い出せなかつたので、最後の発表の時も、もやもやが残っていました。今後はそのようなことがないようにきちんと最後まで話し合いを重ねたいと思ひます。アイヌという未知なものにこの3日間でとても興味を持ちました。まだまだ謎が多いので調べたくなりました。
- 研修の大きな成果として挙げられるのは視野が広がつたことである。分科会や全体講義、発表を通して、様々なことを知ることができ、今後の行動や将来のプランについてもっと考えなければならぬと考へた。最初は事前課題を通してアイヌについて知ることができても、疑問に思つていなかつたり、アイヌ文化の面白さに気づいたりしていなかつた。しかし分科会を受けて、アイヌの文化を学んだり、アイヌを発信している人たちについて知つたりすることで、もっとアイヌについて知りたいと思ふようになった。1日目の分科会で出身地とアイヌのつながりを教えてもらつてから、もっとつながりについて調べようと夜に調べた日もあつた。全体を通して、このような疑問を分からないままにせず、すぐ理解しようとするようになったと思ふ。
- 私はこの合宿で、特に3つのことの大切さを学んだ。3つの大切なこととは、多様性を認めることと、好奇心を持つことと、積極性をもって実行することである。1つ目の多様性を認めることの大切さは主に分科会の中で感じた。分科会ではアイヌについて学び、同じ日本に住んでいるアイヌのことを全く知らずにいたことを実感し、知らないことがたくさんあること、日本の中でも違いがあること、また、そのような違いを理解することなく差別することがあることを学んだ。そこから、私たちの周りには様々な違いがあること、つまり多様性を常に意識することが必要だと考へた。2つ目の好奇心を持つことの大切さはこの合宿の全体を通して感じた。何かを実行するときや学ぼうとするとき、好奇心がなければそこから得られるものが少なくなつてしまふと考へ、大人になつても好奇心を持つことは重要だと考へた。3つ目の積極性を持って実行することの大切さは、分科会や全体でのグループディスカッションの中で感じたことだ。私は、この合宿であまり自分から発言することができず、他のメンバーの発言を聴いていることがほとんどで、そこから積極的に行動しようという意識を持つことと、実際に行動を起こすことの大切さを学んだ。以上のように、私はこの合宿から多様性を認めることと、好奇心を持つことと、積極性を持って実行することを、常に意識することの大切さを学んだ。

分科会 F



人の力をかけ算にするコミュニケーション

岩井 俊宗 (いわい としむね)

特定非営利活動法人とちぎユースサポーターズネットワーク代表理事

略 歴：

1982年生まれ。栃木県宇都宮市出身。2005年宇都宮大学国際学部卒業後、ボランティアコーディネーターとして宇都宮市民活動サポートセンター入職。NPO・ボランティア支援、個別SOSに従事。2008年より若者の成長機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し、若者による社会づくりの加速を目的に、とちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010年NPO法人化。代表理事を務める。その他、認定NPO法人宇都宮まちづくり市民工房理事、栃木県協働アドバイザー、一般社団法人とちぎニュービジネス協会議理事等、他多数。

🌐 講義の概要

1. 仕事の内容・研究テーマ

若者の力を活かして、地域の課題解決・活性化を加速することを使命とし、若者の挑戦と新たな力・新たな変化を求める地域の現場をつなぎ、育むプログラム開発・コーディネート事業を実施。

【独自事業】実践型インターンシップ GENBA CHALLENGE(2012～)、ソーシャルグッドスタートアップキャンプ「iDEA→NEXT」(2012～)、ソーシャルビジネスセミナー(2014～)

【受託開発事業】宇都宮大学課題発見・解決型インターンシップ(2013～)、栃木県 UJI ターン促進事業「はじまりのローカルコンパス」(2015～)、宇都宮市起業家精神養成講座「起業の実際と理論」(2015～)、那須烏山市ローカルベンチャー育成事業(2016～)、栃木県地域づくり担い手育成事業(2016～)、宇都宮大学宇大未来塾(2017～)、コカ・コーラジャパンボトラーズ CSR 事業「ミライ×キャンパス」(2017～)

創設から9年、関わってきた20代～30代の若者は、23,000人(活動時間82,000時間)を超える。その内、自らの意志と力で課題に立ち向かう起業した若者が約42組輩出。また組織の次の一手を創り出す現場に若者が長期間参画する実践型インターンシップや行政施策のプログラム開発など、多様な組織に若者の力を取り入れた変化を提案・実施するプログラム開発と運営、それらを通じて化学反応として新たな価値を創出する「触媒」の機能を持ったコーディネート力は、他県からの講演依頼や『ソトコト』などの全国紙にも取り上げられることを踏まえ、高いものと自負している。これらの実績から、変化を創り出していくコーディネート事業に加え、若者と民間企業、また行政(国、県、市)、大学、をパートナーとし協働による事業推進をしていることが独自性であると捉えている。

〈受賞歴〉 中小企業庁表彰 創業機運醸成賞 (2018.2.9、全国22団体)、下野新聞社「とちぎ次世代の力大賞」奨励賞(2018.5)

2. キャリアパス

1982年宇都宮生まれ。4人兄弟(長男)、7人家族。幼少期は、ガキ大将。森に基地を創って遊ぶ。小学生：サッカーに打ち込む。夢は、冒険家と医者。中学生：バスケットボール(部長)に打ち込む。生徒会長→リーダー的役割を主体的に捉えるようになる。



高校生：JRC 部。2年の夏、赤十字派遣でネパールへ。3週間現地で井戸掘り、学校見学、献血事業視察。→将来、“途上国で働く”ことを描き、現地の日本人の駐在員にどうしたらその仕事に就けるか手紙を書く。“大学生で世界の勉強してください。英語+もう1ヶ国語”→大学に行く意味を見つける。→地元で、それができる大学が。

大学生（宇大国際学部、友松研究室）：NGO マネジメント、住民主導の開発を専攻。2年生くらいから国内問題にも目を向ける。特にNGO・NPOなどの市民による社会課題解決に可能性を感じるものの、職業として成り立っていない現状→“NPO・NGOで飯を食うモデルになる”と自分に旗を立てる。

2005年大学卒業後、ボランティアコーディネーターとして、NPO・ボランティアを支援する宇都宮市民活動サポートセンター入職。制度では支え切れないSOS(年間100件程度の相談)に、ボランティアチームを組み対応する。その中で大学生等若者が関わると突破できる数多い体験から、2008年若者の成長の機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し若者による社会づくりの促進を目的にした事業を行うとちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010年 NPO 法人化。現在代表理事を務める。

現在36歳、妻(国際学部同級生)9歳の息子、3歳の娘と4人暮らし。学生時代の趣味は、国内外を旅すること(屋久島、ママチャリで富士山・成田空港・レインボーブリッジ、アメリカ、韓国、マレーシア、シンガポール、ベトナム)。

3. 分科会の内容

- 違いを強みにしていくためのコミュニケーションとして、質問力、言葉の意図を読み解く力、建設的に意見を積み上げていく思考、相手のHAPPYを提案していく力を養う。
- 演習(ワークショップ)を通じて、実践的にコミュニケーションを重ね、自身のやりたいことの実現に向けて仲間力を借りていくこと、またそれが相手に対してもHAPPYに感じられる提案を創り出していく。
 - ▶ コミュニケーションとは何か。
 - ▶ 人が喜びを感じるメカニズム、マズローの5つの欲求、ジョハリの窓など。
 - ▶ アイデアを形にしていくプロセスと提案書の作り方。

4. キーワードリスト

- コーディネート
- ダイバーシティ
- 価値創造



5. 参考資料等

特に無し。

6. 事前予習用リーディング課題

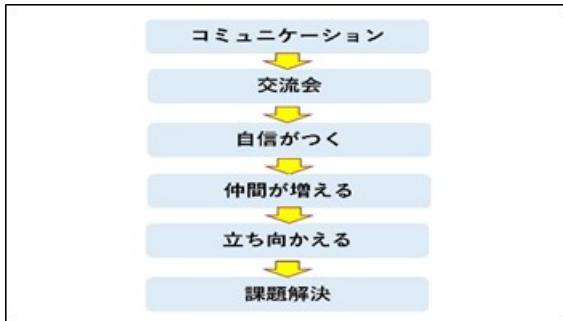
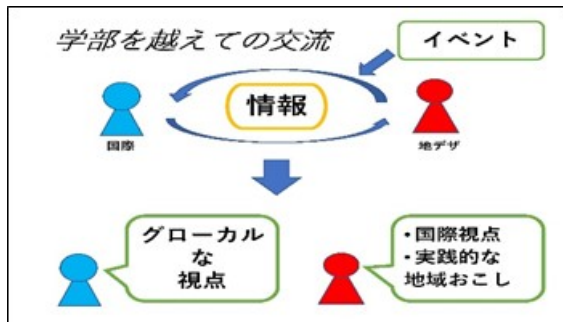
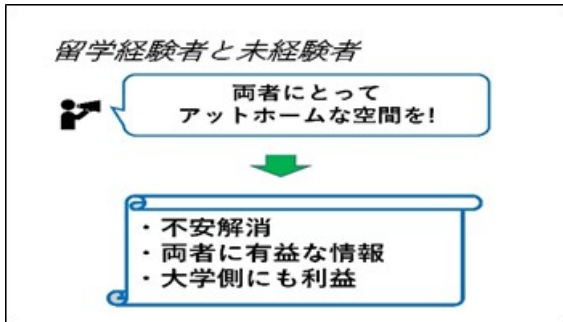
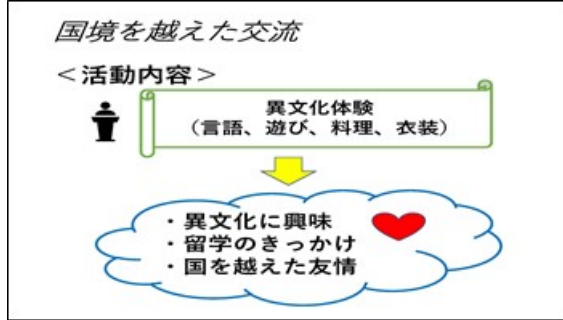
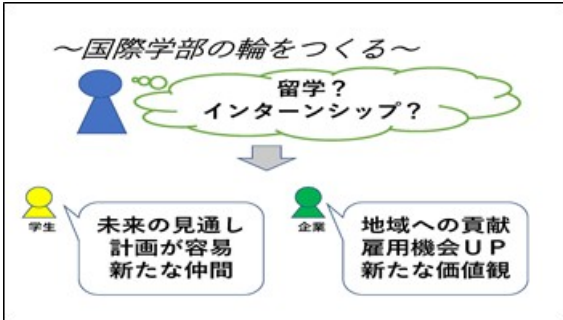
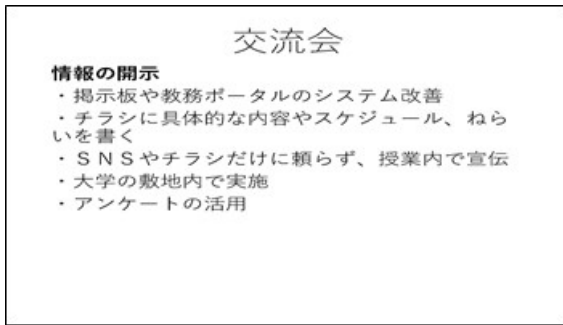
- 自身の自己紹介をご用意ください(氏名、所属、大学で学んでいること、分科会を選んだ理由、将来の展望、今回持ち帰りたいこと)。

参加者による全体発表

国際キャリア合宿セミナー
「人の力を掛け算にする
コミュニケーション」

コミュニケーションにおける大事なこと
分科会 F
メンバーズ：阿久津実希、大場菜々花、貴田さくら、佐井愛菜、
佐藤竹貴、石堂漢、高橋礼佳、瀧原琳、二本松涼香、橋本唯南、
廣村美優





参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 私はこの分科会からコミュニケーションの奥深さを学びました。自分が知らないコミュニケーションの世界が広がっていてとてもためになったと思います。さらに分科会で出会った人たちと仲良くなるにつれ、これがコミュニケーションかと、1つ1つ意識して話し合うことができました。分科会で学んだことを学生生活に活かせたらと思っています。
- 私は今回いろいろ教えていただいた岩井さんのされているような職業に就きたいです。これから若者にフォーカスすることが大切なのではないかと思いました。そこで、今、私が若者であるうちに、沢山インターンやボランティア、交流会に参加し、若者にとって何が必要なのか、どうすれば社会をより良くできる若者を育成することができるのかを知って、肌で体験したいです。そして、私はこれから岩井さんの会社で、インターンをさせてもらおうと考えています。そして岩井さんと一緒に若者と企業の間を取り持つお手伝いをさせてもらいたいです。私はそれを通して、全く同じことをするのではなく、そこもかけ算をして、私と岩井さん、私と Tochigi Youth Supporters Networks で、お互いに HAPPY にな

れたらいいなと思います。そして栃木で4年間以上修行して、また新たに愛媛で、愛媛に合わせた、若者と社会をかけ合わせた企業、NPO、チームを立ち上げたいです。

- 自身のキャリア目標を達成するためには人との関わりは決して避けては通れない。その中で相手が求めているもの、自分が実現させたいものを共有し、街の活性化へとつなげるためにも、今回の分科会で学んだコミュニケーションを日頃から実践し、数年後仲間と共に活動する際にはその活動をスムーズに、かつより価値のあるものへと昇華できるよう、練習していきたい。
- 意見が出なくて沈黙があったとき、岩井先生が「沈黙は質問を作っているクリエイティブな時間だから、気まずいと思わなくて良いですよ」と言ってくださったことがとても嬉しかったし、気が楽になった。また、どんな意見にも「いいね」「そうだね」と言ってくれ、受け入れてくれていると分かるコミュニケーションを自ら取っていることに安心感と感銘を受けた。コミュニケーションにおいて大事なことの議論では、自分の中だけでは答えが出せずくすぶっていた疑問を他の人に投げかけ、それぞれの人からそれぞれの答えを貰うことでモヤモヤした気持ちが晴れた気がする。
- 今回の分科会を通して人に伝わりやすいプレゼンが重要だと気付かされました。そして、将来のキャリア形成においてプレゼン力が必要になると思うので、学生生活において強いプレゼン力を身に付ける必要があると思いました。もう1つの今後の課題は、コミュニケーション能力を上げることだと考えました。比較的に人前が出るのは強い方なのですが、コミュニケーションについて学んでみたところ、とても奥が深く、自分でも無意識に行っていることや知らないうちに相手に嫌な思いをさせてしまっていることなど、コミュニケーションについて知っているつもりでしたが本当に新しい発見ばかりでとても楽しかったです。そして将来に向けて身に付けていかなければいけないことの1つだと思いました。
- 私は今後、海外留学をし、将来は外資系企業や海外で働くことを視野に入れている。しかし、今まで海外での経験も少ないため、言語能力に自信がない。日本語でも流ちょうに話せるわけではないのに、外国語となったらさらに話せなくなってしまう。しかし、今回の分科会からコミュニケーションにおいて大切なことや、コミュニケーションのコツ等を聞き、勝手に諦めかけていた外国語もできるのではないかと考えてきた。日本語、外国語どちらであっても、ボディランゲージなどの非言語コミュニケーションは大事であり、相手に興味を持つことが大事なのは同じである。この得た知識を使って、対人コミュニケーション能力を伸ばすことができると考えている。そのために、より異文化を理解する必要があると考える。色々な人の考え方を受容できる心を持つようになれば、将来グローバルな職場で働くときにきっと役に立つだろう。今私が挑戦できることは、海外の留学経験だと思う。そこでコミュニケーションを多くの人ととり、多くの人を考えを知りたい。
- コミュニケーションについて学びました。座学と実践で学びました。私は、今までそこまでコミュニケーションに対して苦手意識はありませんでした。しかし、今回の合宿を通して、コミュニケーションがここまで奥深いものだと知りました。私が思っていたよりも、自分と相手の行動、言動には意味があり、良い印象も悪い印象も与えてしまうものでした。しかし、それを教えて頂いたおかげで、より効率よく楽しく HAPPY にコミュニケーションをとれるようにもなりました。
- コミュニケーションはキャリアに直結しているというよりはキャリアを掴み取る過程で必ず必要になる手段であり、かつ最も重要なことであると言える。ここで学んだことを最大限生かして、コミュニケーションを駆使し、キャリア形成、さらにはその先の人生にも役立てていきたい。
- 3日間という短い期間の中で、分科会で学んだことの要点をまとめ、それを発表するという活動を通して、社会人に求められる応用力を培う練習になった。また、私たちの分科会ではコミュニケーションをテーマとし、人と仲良くするためのコミュニケーションはもちろんのこと、社会人として組織の中で個々の力を結び付け、大きな課題へと立ち向かうためのコミュニケーションについても学ぶことができた。
- 将来、キャリアの形成に向けて、人と人の協力が不可欠であると考えている。どんな職種にとっても、1人の力だけでは足りないのである。様々な友達が必要だし、人脈を拡大し、様々な人と交流することが大切である。これからの生活の中でも、人とコミュニケーションをしている時には分科会の中で学んだコツを活用したいと思う。
- 自分たちで一からアクションプランを組み立てるのは大変苦労したが、その過程で岩井先生の伝えたいことである、「人の力を掛け算にするコミュニケーション」を体験しつつ、活動できたので、コミュニケーションについての学びがより一層深まった。

5. パネルトーク

司会： 重田 康博氏 宇都宮大学 国際学部 教授

各パネリストが、体験を踏まえて、キャリア形成に関して「大切なキーワード」を3つ挙げ、その理由を説明した。その後、参加者によるパネリストへの質問、グループ別ディスカッション時間を設けられ、意見が発表された。

パネリスト： 石川 尚子 氏 オリオンコンピュータ株式会社 代表取締役 オリオンIT 専門学校 理事長	
①経験	● 2019 入国管理法の改正。外国人労働者との共生。日本人として何をすべきか。
②スキル	● 外国人労働者と共生していくには、お互いにウィンウィンになれる関係を築く術を身につける。 ● お互い win-win な関係。お互いがお互いの国を思いやれるようになる必要。
③知識	● AI には知識では勝てないが AI は知恵は持っていない。AI に勝てるものは知恵と想像力。 ● 日本人特有の感性をいかす。 ● 知識を行動に変える力が重要。

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- AI と外国人労働者が普及し更に広がって行く中で、私たちの社会の在り方、例えば、外国人労働者とどのように共同生活していくかを見直すべきだと感じた。技能実習制度が今年四月から導入され、働いている外国人をよく見かける。本当に今、多文化共生の在り方が試されているのだと思った。
- 人を繋ぐ重要性を論じた先生の人生観や考え方の中に、ビジネスが大きく関わっていることが分かり、職業に対しての見方が変わった。
- 留学でなくても自分が立ち上げた仕事において外国人と関わることが多くなり、外国人労働者との共生を考えるようになっていったということに興味を持った。
- 自分の人生を生きていく上で、興味を持ったことに挑戦して自分から行動しないと得られないスキルを身につけていきたいと思った。自分の強みを見つけて行きたい。留学したいと改めて思った。
- 外国人労働者の受け入れについて、日本人はどのように外国人労働者と共生できるかという問題が先生に提示された。その一方で外国人は、どのように日本の社会に溶け込めるようになるのか。日本人と外国人の交流をどのように促進するのか。また、日本人として、外国に行くときどのようにしてその国の社会に溶け込むのかを考えればよいのではないかと思う。



パネリスト： 伊藤 解子（いとう ときこ） 国際協カコンサルタント NPO 法人日本国際ボランティアセンター（JVC）理事	
①幸せは自分が決める	● 安定した仕事を理想とする価値感。自分の価値観に自己矛盾がないか。 ● 自分の幸せは自分の判断で決めるもの。
②価値観を崩す	● 自分の持つ価値観の危険性に気づく。時に押しつけ、相手を傷つけることも。
③ネットワーキング	● ネットワーキング=人と人との繋がりが大切。

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 自分の幸せを模索し、何度も転職できる強さはすごいと感じた。そして、柔軟性もあるからできたことだと感じた。転職したり転勤したり、自分の人生にそんなことが起きるのだろうか。それ程までに興味のあることに出会えていることがすごい。自分たちは大学で見つけることができるのか。今回のように色々な話を聞ける場に自ら積極的に参加し出会いを増やすべきだと感じた。



- 「幸せは自分が決める」という話で、何が幸せなのかは Action を起こさないとわからないから、チャレンジ精神を持とうと思った。また、人との繋がりも自分の人生の中で大事になってくるため、出会いを大切にしたいと考えた。ネットワークを作るときに意識の矢印が自分に向いていないか考えることが必要だと知った。
- 人は一人では生きていけないからこそネットワークを大切にしていくことで救われることがあるのかもしれないと思った。

パネリスト： 飯塚 明子（いづか あきこ） 宇都宮大学 留学生・国際交流センター 助教	
①今の課題(勉強・仕事など)に集中	<ul style="list-style-type: none"> ● 目の前の課題一つ一つに誠実に取り組むことで得られるものも大きい。 ● punctual に。やるべきことを今ちゃんとやるのが大切。
②失敗から学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ● 失敗することで再発防止策を練ることができる。 ● 人には複数の顔がありどこかの顔で失敗しても他の顔によってバランスをとっている。 ● 何もしないより挑戦。若いころの失敗は人生の宝になる。
③ワーク・ライフ・バランス	<ul style="list-style-type: none"> ● 仕事(ワーク)と生活(プライベート)との調和。バランス。 ● キャリア以外のプライベートで充実も大事。たくさんの顔を持つ。

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- チャレンジするから失敗する。チャレンジしないほど成功でも満足を得られないという言葉は、これからの私のキャリアを築いていく上で大切なキーワードだと思った。
- 日本は休暇をとりにくい国だと思うが、そんな中で、上手にワークライフバランスをとろうとするには何をすればよいか、何を心がければよいか。
- 興味があることはやってみることが大切だと感じた。
- チャレンジするほど失敗する。チャレンジしなければ成功でも満足を得られない。という言葉はこれからの私のキャリアを築いていく上で大切なキーワードだと思った。
- 色々な顔の自分が大学生になってから急に増えてなんとなく恥ずかしさを感じていたが、顔は沢山あった方がよいという飯塚先生のお話に救われた。



パネリスト： 佐藤 栄治（さとう えいじ） 宇都宮大学 地域デザイン科学部 建築都市デザイン学科・准教授	
①好奇心	<ul style="list-style-type: none"> ● 好奇心を持てるものに全力を注ぐ。 ● ゴールを達成するまで追い求め続けること。 ● 学生時代はとにかくやってみることが大事。
②瞬発力	<ul style="list-style-type: none"> ● 大量の情報源から正しく必要なものを素早く選択。 ● 行動を始める力を身につける。
③ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ● 人とのネットワークが仕事をするうえで重要になっていく。 ● 色々な仕事が重なってネットワークが生まれる。

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- データがあれば何でもできる。制度だけ知ってしまえば、データを見て社会の現状がわかる。医療福祉は日本が課題の先駆けとなっている。これに興味を持った。今私が受けている医療制度は問題なく受けられているからだ。どんな課題があるのか知りたい。
- 客観的な見方はもちろんだが、主観でも見つけられることがある。それを含めて幅広い視野で物事を見ることができるようになりたい。
- データの読み方には理念が必要で、見えているデータ群が正しいことばかりではないということを理解した。



- 客観的に見えていてもそれは分析者の主観だったりするのではないだろうか。見えてるデータが必ずしも正しくない。切り捨てる場所は切り捨ててもよいという判断力を養うことも必要だと学んだ。

パネリスト： 廣瀬 隆人(ひろせ たかひと) 宇都宮大学 地域創生推進機構 コーディネーター	
①アイヌ民族	● 幼少期からアイヌの人々が行きかう町で生活。差別意識が横行する環境で人権意識を研ぎ澄ませます。
②ウイльта	● ウイльтаは少人数だが現在も網走に在住。
③多文化共生	● ドミナント(主流社会)ではない日本。いくつもの日本を学ぶこと。 ● 日本は単一民族社会ではない。日本には、アイヌ、網走にはウイльтаが生存していることを学ぶ。

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 外国との間の多文化共生も大事だが、日本国内でお互いを理解しあうことが大切だと思った。
- 廣瀬先生のお話から、少数の人々も多数と対等に扱うべきだと思った。外から来た外国人だけでなく、アイヌ民族やウイльтаに対する多文化共生も必要だと思う。
- アイヌに差別についてのお話から日本人は差別に鈍感なところがあるのではないかと思った。（中略）ジェンダーの差別においても日本人は大して気にとめていない。自分の気づいてない差別について学び、異なる文化を理解することが大切だと思った。
- 知らない用語が多かったがやりがいがあると思った。成人教育についての話をもっと聞いてみたい。
- 自身の差別経験をもってアイヌやウイльтаの文化について考えていることが印象深かった。



パネリスト： 岩井 俊宗 氏 特定非営利活動法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事	
①創る	● 正解を創るプロセスを楽しむ生き方。 ● 現在の日本、過去に実例のない時代に生きている(少子高齢化、財源難)。新しいものを創るスキルが今後必要になる。
②コーディネート	● 違うものを繋げてコーディネートして新たなハッピーを生み出す。 ● ネットワークを築くために、矢印が内向き(自分)ではなく外(相手)を向いているか。
③実践的仮説検証	● 疑問→仮説→実践→検証。 ● 疑ってかかることも大切。

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- これからの時代、私は自分が考えた道を信じて進むのではなく、新しいものを楽しみながら、プロセスを楽しむのは私には新しい考えであって、とても興味深かった。それがこれからの社会にも求められるとなると面白いと思った。
- 「正解を創る」ということばが印象深かった。今まで正解は探すものだと思っていたが、新しい発想だと思った。
- 日本社会の現状が想像より思わしくない事実に衝撃を受けた。しかし、その現状があるからこそ、私たちが新たに動く必要があるということを受け、様々なチャンスが存在すると考え、不安が期待へと変わった。
- 今までのキャリア形成の方法では通用しない時代になっているんだと感じた。自らの成長のために今までのやり方を追うのではなく、自分で正解を導き出し、新しいやり方を生み出さなければならないと思う。岩井先生の自ら正解を創るという意識は今後のキャリア形成において軸になる考え方だと思う。



1. 参加者名簿

国際キャリア教育

	氏名	大学等	学年
1	あいはら しょうご 相原 翔虎	宇都宮大学 国際学部	1年
2	あおの ななこ 青野 ななこ	宇都宮大学 国際学部	1年
3	あこ みき 阿久津 実希	宇都宮大学 国際学部	2年
4	ありが さやか 有我 紗耶香	宇都宮大学 国際学部	1年
5	いしかわ さき 石川 咲季	宇都宮大学 国際学部	1年
6	いしやま 石山 ちひろ	宇都宮大学 国際学部	2年
7	いずみ あやか 和泉 朱香	宇都宮大学 国際学部	1年
8	いとう あり 伊藤羽美	宇都宮大学 国際学部	1年
9	いわさき けいた 岩崎 圭汰	宇都宮大学 国際学部	1年
10	オオタニ ジュリオ ^{わたる} オオタニ ジュリオ弥	宇都宮大学 国際学部	1年
11	おおば ななか 大場菜々花	宇都宮大学 国際学部	2年
12	かげやま みゆ 影山 実悠	宇都宮大学 国際学部	1年
13	かねや しゅん 金谷 駿	宇都宮大学 国際学部	1年
14	かた ざくら 貴田 さくら	宇都宮大学 国際学部	1年
15	こが かずき 神谷 和希	宇都宮大学 国際学部	1年
16	かじら りょう 齋藤 涼	宇都宮大学 国際学部	1年
17	かみい みお 酒井 美音	宇都宮大学 国際学部	1年
18	さかい あいな 桜井 愛菜	宇都宮大学 国際学部	1年
19	さとう あけ 佐藤 愛海	宇都宮大学 国際学部	2年
20	さとう ちくせん 佐藤 竹善	宇都宮大学 国際学部	1年
21	すずき めい 鈴木 杏奈	宇都宮大学 国際学部	2年
22	すずき ひとみ 鈴木ひとみ	宇都宮大学 国際学部	1年
23	すなが わかな 須永 若菜	宇都宮大学 国際学部	1年
24	せき ぶんかん 石 雲漢	宇都宮大学 国際学部	1年
25	たかはし あゆむ 高橋 歩夢	宇都宮大学 国際学部	1年
26	たかはし れいか 高橋 礼佳	宇都宮大学 地域デザイン科学部	1年
27	たけだ いつき 武田 逸輝	宇都宮大学 国際学部	1年
28	たけだ あり 竹田 侑海	宇都宮大学 国際学部	1年
29	たどころ りさ 田所 莉沙	宇都宮大学 国際学部	1年
30	ち ちえりん 遲 宸琳	宇都宮大学 国際学部	2年
31	つがこし まどか 塚越 まどか	宇都宮大学 国際学部	3年
32	とほし ななみ 戸星 七海	宇都宮大学 国際学部	1年

	氏名	大学等	学年
33	なか のぶ 中倉 桜都	宇都宮大学 国際学部	1年
34	にほんまつ さやか 二本松 涼香	宇都宮大学 国際学部	1年
35	はしもと ゆいな 橋本 唯南	宇都宮大学 国際学部	1年
36	はっとり かな 服部 花菜	宇都宮大学 国際学部	2年
37	はま しおり 濱 詩織	宇都宮大学 国際学部	1年
38	ひらない まなせ 平内 真世	宇都宮大学 国際学部	1年
39	ひろむら みゆ 廣村 美優	宇都宮大学 国際学部	1年
40	ふじた ありな 福田 彩乃	宇都宮大学 国際学部	1年
41	ほあんでいくつこ ^{huân} HOANG THI NGOC HUYNH	宇都宮大学 国際学部	2年
42	ほんた ほすみ 本多 美未	宇都宮大学 国際学部	2年
43	まつおか いずみ 松岡 和泉	宇都宮大学 国際学部	2年
44	まつどき なつみ 松崎 夏未	宇都宮大学 国際学部	1年
45	みやた のぞみ 宮田 望	宇都宮大学 国際学部	1年
46	むらこし のりか 村越 紀香	宇都宮大学 国際学部	1年
47	よう てんしゅく 楊 添植	宇都宮大学 国際学部	1年
48	おおなか けんたろう 大中 健太郎	日本大学	1年
49	かたがやま こげは 片山 梢河	宇都宮海星女子学院	2年
50	ふじむら ななみ 藤原 七海	帝京大学	4年
51	ほり まゆこ 堀 真祐子	足利大学	1年
52	やまざき こぶた 山崎 嵩太	小山工業高等専門学校	

参加者内訳 合計 52名	
宇都宮大学	47名
日本大学	1名
宇都宮海星女子学院	1名
帝京大学	1名
足利大学	1名
小山工業高等専門学校	1名

2. 参加者全体コメント

国際キャリア教育

参加の感想（コメントは原文のまま記載しています。）

- 3日間かけて初めて会った人たちと一つの課題に取り組み解決策を考え発表するには様々な学び、気づきが得られてよかった。
- 「国際キャリア教育」という名の授業ではあるが、これからの社会が直面する問題や能力について知り、学ぶことができるので、国際学部に限らず、他の学部にもっと参加して欲しいと思った。充実した学びを得た合宿だったと感じている。
- 私は最初から希望通りの分科会で興味のある分野について学ぶことができたが、希望通りにいかなかった人も3日間で分科会の内容に興味を沸いたと言っており、自分が興味なかった内容も学んでみることで視野が広がるきっかけになるのだと思った。
- 普段の大学での授業とは違い学年も学校も違う様々な人々とよりアクティブな研修ができた。
- 様々な国籍、立場、技術から、社会に対して何ができるかを考える技術が磨かれたと思う。分科会ではテーマについて集中的に学んだ内容を自分のできる範囲でどのように応用していけるのか、考えることができた。全体会では、他の班がテーマについて学んだことだけでなく、課題点やなぜそれを解決していく必要があるか等より深い知識を得ることができた。
- 将来のイメージが浮かばずになんとなく受けようと決めたキャリア教育だったが、国際協力事業に再び惹かれ、そういった将来もよいと思った。
- 普段の大学生活ではあまり話すことのないような相手からキャリア形成についてどのように考えているのか聞くことができたことがとても新鮮で、同じ国際学部でも進みたいと思う道は非常に多様で、思っていた以上に色々な未来が待っているんだと価値観が少し変わるきっかけともなった3日間だった。
- このセミナーはワークショップや意見の交換が多く、友達の意見をいつも以上に聞くことができたと感じる。だからこそ、自分では思いつかなかったような考えを知ることができ、刺激になった。そしていつも以上に積極性やコミュニケーションの必要性を感じ、成長するきっかけの一つになっていればよいと思う。また将来を考える機会にもなったので、このセミナーに参加して良かったと思う。
- まずは自分がこころの底からやり通したいということを見つけることから始めようと思う。報道関係に興味があるが、自分は報道を通して何がしたいのか、どのように社会と関わっていきたいのか、もう一度深く考えてみようと思う。
- キャリア合宿ではあったが、文化、コミュニケーションなど直接繋がらないものもあったので、もう少し分科会毎にキャリア色が強くなっても良いのではないかと思った。
- 非常に満足している。このセミナーで参加した分科会での内容が自分の思い描く将来になった訳でもなく関係があった訳でもなかったが、経験、考え方、知識としてのキャリア形成をすることができた。（中略）自分の人生にとって有意義な3日間となった。
- 分科会を通して国際協力の知識が深まったのはもちろんのこと、問題を考え解決していく道筋を学びました。（中略）普段あまり経験することがない学生主体の授業が行えて自分が参加しているという実感もあり意欲的に授業に取り組むことができました。
- 選択肢の多様性、全体会で重田先生が話していたように、一つの分野ではなくいくつもの分野を取り入れた複眼的な視点が大事だと思った。
- 3日間仲間と一緒にテーマについて深く調べ、充実していて達成感で一杯である。感じた意欲ややりがいこれから大学生活に役立てていきたい。
- 多くの学びがありキャリア形成に向けて必要な心構えや今大学生のうちにやるべきこと、自らのキャリアへの考え方などにつながる重要なことを学べたのでこの合宿に参加して本当に良かったと思います。
- 分科会を通してまだまだ知らないことや、自身の凝り固まった価値観に気づくことができた。よって、大学生活の中で海外に出たり自身の活動範囲を広げ、様々な人や価値観に触れて視野を広げたいと思った。

- 分科会の内容はもちろん他の分科会の内容も知れば知るほどとても興味深かったです。特にアイヌ文化についての分科会の話は今の日本に浸透しなければならない問題だと思いました。
- 大学の授業では、外の世界に目を向けることが多くてなかなか日本社会についてじっくり考える機会がなかったので、他の分科会の発表を聞くことで気づかされたことや考えさせられたこともとても多かったように感じた。
- 他の分科会の人とは食事や全体会でしか一緒にならなかったのですが、私たちが学んだことはすべてに共通するものでした。全体を通じて感じたのは、ステレオタイプを排除し違いを個性、多様性として認めることだと思いました。
- 通常の講義では知識のみであるが、この合宿では、知識を得ることに加え、それを実践することができ、有意義な時間であった。
- 今まで興味がなかったことも一度知ってみることで、視野が広がり物事を違った視点で見つけることができ問題为解决する際のアプローチに多様性が生まれるのではないかと感じた。
- とても有意義な時間を過ごすことができたと思う。コミュニケーションは人と関わり合う中でなくてはならないものだが、コミュニケーションを上手くはかることやコツなどを実践的に学べる機会は少ない。今回の経験はこれからの生活に直結し自分を変えていくと思う。



国際キャリア実習

1. 令和元年度「国際キャリア実習」実施要項

1. 趣旨・目的

- ① 趣旨： 本実習は、グローバルマインドを養う「グローバル人材」の育成のために行われる国際学部の「国際キャリア教育プログラム」の一環として行われるものです。「国際キャリア教育プログラム」では「国際ビジネス」、「国際協力・国際貢献」、「多文化共生と日本」、「異文化理解・コミュニケーション」の4つのテーマを掲げていますが、本実習では、特に「国際協力・国際貢献」や「異文化理解・コミュニケーション」の分野で活躍することを目指して、海外のNGOや公的機関でインターンとして実習経験を積み、実務能力を高めます。
- ② 目的： 本実習は、「国際キャリア教育プログラム」の次の3つの目的を達成させるために、現場体験、実習経験を積み、実務能力、企画力とコミュニケーション力を高めます。さらに、自分の関心分野や専門性をより明確にします。
 - 「働くとは何か」について考える。
(Grasp the image of "working in society with motivation.")
 - 自分と地域社会や世界とのつながりを考える。
(Provide opportunities to think about your roles in local and global societies.)
 - 主体的に関わりたい問題や分野を見つけ、今後の学びの動機を考える。
(Find motivation to actively pursue your career.)

2. 実施時期・期間、募集人数

- ① 時期： 夏期 令和元年8月～9月、春期 令和2年2月～3月
- ② 期間： 約2～4週間
- ③ 実習日： 原則、土日を除く実質10日間（1日8時間）。なお、実習先の活動状況により、土日も勤務する場合がある。
- ④ 募集人数： 夏期 5名、春期 5名

3. 実習先団体

- ① 実習先団体は、南アジア、東南アジアおよびアフリカで国際協力活動を実施している政府機関やNGO。詳細は、受入団体一覧を参照のこと。
- ② 実習先団体に追加・変更・中止が生じた場合は、国際学部「国際キャリア教育プログラム」のHP (<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/activity/index.html>) 等で通知する。
- ③ 実習内容は、場合によっては、変更されることがあるので、事前に実習先に確認する。
- ④ 実習先団体のやむを得ない事情、または実習国の政治・治安情勢の悪化や大規模な自然災害の勃発、感染症の発生等により、実習国の変更、または実習を中止し、緊急に帰国する事がある。特に、外務省の「海外安全情報」において、実習国の危険レベルが「2」以上になった場合、その目安となる（参考URL：<https://www.anzen.mofa.go.jp/riskmap/index.html>）。

4. 応募および参加の条件

- ① 応募の時点で次の全ての条件を満たしていること。
 - 国際学部の1年生から3年生（実施期間に休学中の者は除く）であること。

- 心身ともに健康である者。(本学所定の健康診断を受診していること。受診していない場合は、病院等で受診し、応募時に健康診断書を提出すること)。
 - 法定の予防接種(三種混合・結核・ポリオ・風疹・麻疹・日本脳炎など)を受けていること(不明な場合は「母子手帳」等で確認すること)
 - 本学指定の「学生教育研究災害傷害保険(学研災)」および「学研災付帯賠償責任保険(学研賠)」に加入していること。
 - 実習先団体が求める語学力を有していること。
 - 参加動機および実習目的が明確であること。
 - 本実習への参加について、保護者または家族から事前了解が確実に得られていること。
 - 本実習実施国への渡航が可能であること。
- ② 渡航前までに次の全ての条件を満たしていること。
- 保健管理センターで健康に関する面談を受けていること。
 - 国際学部及び全学で実施するオリエンテーションや事前研修(ビジネス・マナーおよび危機管理)に参加していること。
 - 本学指定の「学研災付帯海外留学保険」に加入し、「アイラック安心サポートデスク」の安全確認アプリ『アイ・ファインダー』をダウンロードしていること。
 - 同窓会からの渡航費補助を希望する場合には、「国際学部同窓会」の会員であること。(本実習は、国際学部同窓会から助成金を受けているため、非会員の場合は渡航前に入会すること。但し、同窓会からの助成を希望しない場合はこの限りではない。申請時にその旨申し出ること。)
- ③ 帰国後に次の全ての条件をみたすこと
- 必要書類(報告書や領収書など)を期日までに提出すること。
 - 報告会での発表(プレゼンテーション)
 - 国際学部同窓会への報告(必要に応じて)
- ④ 以下のいずれかに該当する者は、応募できない。
- 参加者自身の国籍と同じ国での実習を希望する者。

5. 参加費

- ① 「国際キャリア実習」への参加および現地での実習にかかる諸経費は、全額自己負担を原則とする。ただし、国際学部同窓会員の場合には、国際学部同窓会が渡航費の一部を助成金として支援する(詳細は第6項を参照)。
- ② 諸経費の内訳(例)：
- 渡航費(往復航空券代、国内交通費、海外旅行傷害保険料、旅券・査証の取得等にかかる経費)
 - 国内事前研修費(交通費・宿泊費など ※受入団体による)
 - 現地滞在費(宿泊費・食費・交通費など ※受入団体による)
 - 予防接種代(※実習国による)
 - 実習参加費(※受入団体による)
 - 実習にかかる諸経費(地方視察時の国内交通費など ※受入団体による)
- ③ 留意点
- 参加費の大半を占めると思われる渡航費は、利用する航空会社や航空券の種別、購入時期によって大きく変動する。
 - 現地滞在費についても、受入団体の事情によって、宿泊先(一般のホテル、受入先団体の宿泊施設、現地スタッフ宅でのホームステイなど)が異なる為、宿泊費も大きく変動する。

- 受入団体によっては、現地でのインターンシップ参加にあたって、参加費の支払いが求められる場合がある。
- 受入団体や保健管理センターから、狂犬病、破傷風、A型肝炎などの予防接種が求められた場合は、これを接種することを強く推奨するが、予防接種代として数万円がかかる場合がある。

6. 国際学部からの渡航費補助への申請

① 渡航費補助について

- 渡航費補助の支給額は、本実習の海外インターンシップに参加するための往復航空賃、空港税、空港施設使用料、旅客保安サービス料、燃油付加運賃及び発券手数料に相当する額の8割を上限とするが、予算の都合上、上限の金額は最大8万円までとする。
- 往復航空賃は、日本国内の最寄りの国際空港から、実習先の最寄りの国際空港間の最も経済的かつ常識的な経路によるエコノミー・クラスの割引または格安航空券代とする。
- 渡航費補助は、実習を終了し帰国した後、航空券代等の内訳が明記された領収書（原本）の提出後から、1～2ヶ月後に大学から各自の個人口座に振り込まれる。

② 申請の手続き

- 「国際キャリア実習」の応募書類の提出をもって、渡航費補助の申請に代える。
- 最終審査に合格した時点で、渡航費補助の受給資格が得られる。

③ 支給の要件

渡航費補助の支給を受けるには、次の要件をすべて満たすこと

- 必要な手続書類等の期限内の提出や事務手続の迅速な履行
- 担当教員や受入先団体との事務連絡は迅速に行うこと（特にメールへの返信）

ただし緊急時を除き、連絡は電子メールで行うこと（LINEなどのSNSは使用しない）

- 事前研修の参加（詳細は後日案内）
- 保健管理センターでの面談（母子手帳持参）
- 実習先到着時、実習開始1週間後、帰国時には担当教員に連絡すること
- 「実習日報」および「報告書」の提出（帰国後2週間以内）

④ 「とちぎグローバル人材育成プログラム」について

「大学コンソーシアムとちぎ」が実施する「とちぎグローバル人材育成プログラム」（基礎コース）に応募し、支援金の受給が決定した場合には、国際学部からの渡航費補助を受給することはできない。

7. 単位認定

- ① 現地での80時間以上の実習を終了し、単位認定に必要な書類（報告書、実習日報等）を全て提出した学生は、担当教員の成績評価に応じて「国際キャリア実習」の2単位が認定される。
- ② 単位認定に必要な実習時間数（80時間以上）を満たすように実習計画を立てること。
- ③ すでに「国際キャリア実習」を履修済みの学生は、再履修となり過去の成績は抹消される。

8. 応募方法

以下の応募書類を提出期限までに国際学部事務室に提出すること。

- 参加申込書（所定のもの）
- 自己紹介・応募動機書（実習希望先団体に資料として提出する場合がある。）
- 健康診断書（今年度実施の本学の健康診断を受診していない場合）

9. 参加者の選考および決定

① 選考方法

参加者は、書類審査と面接より選考する。なお、応募者が多数で、審査結果が拮抗する場合は、以下の優先基準を適用する。

- 上級生を優先する。
- 「国際キャリア教育セミナー」および「International Career Seminar」の履修済者を優先する。
- その他のグローバル人材育成プログラム「Learning+1」の履修済者を優先する。
- 過去に「国際キャリア実習」または「国際インターンシップ」に参加したことのある者が再度応募する場合、選考結果が同順位の場合、初めての応募者を優先する。

② 一次審査について

- 一次審査（面接）実施日：応募書類提出後に随時実施（日時は個別に応募者に連絡）
- 審査の結果は、応募者本人に、一次審査後の一週間以内に電話又は e-mail で連絡する。
- 実習希望先団体との面接が不要な者は、最終審査の面接を免除する。

③ 実習希望先団体との面接について

- 一次審査合格者のうち、実習希望先団体との面接等が必要な者は、所定の期日までに、実習希望先団体との面接等を受けるものとする（面接等にかかる経費は自己負担とする）。所定の期日までに実習希望先団体の面接等を受けなかった場合は、最終審査対象者としての資格を失う。

④ 最終審査について

- 実習希望先団体との面接を終了した者について、最終審査の面接を実施する。
- 面接免除者も含めた最終審査の結果は、後日、応募者本人に書面で通知する。

10. その他の注意事項

- 参加決定後の自己都合による実習先の変更は、原則として認めない。
- 「海外インターンシップ」前後の個人旅行は認めない。
- 海外渡航時や現地実習時には、危機管理や健康管理に十分留意して、事件や事故との遭遇を極力回避し、感染症を予防する努力を怠らないこと。
- 自己責任において、実習先に作業用パソコンを持参することが望ましい。
- 実習国の治安状況や健康管理に関する情報は、信頼のおける以下のサイトなどを参照しておくこと。
外務省「海外安全ホームページ」<http://www.anzen.mofa.go.jp/>
外務省「海外安全劇場」<http://www.anzen.mofa.go.jp/video/index.html>
厚生労働省検疫所「FORTH：海外で健康に過ごすために」<http://www.forth.go.jp/index.html>

2. 今年度受入団体および実習概要一覧

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
1	(株) アースアンドヒューマンコーポレーション JICA 事業を受託するコンサルタント会社。	東京都 町田市	エチオピア アディスアベバ	日本人専門家の補 佐的作業
2	アンコールクッキー アンコール・ワット型の手作りクッキーの店。カン ボジア人の手による本物のカンボジア土産を作る ことを目指して開業して以来、今やカンボジアの定 番土産。	カンボジア シュムリアップ	カンボジア シュムリアップ	店舗での接客・販 売、商品の企画開 発、広報・マーケッ ティング等
3	特定非営利活動法人 ブリッジ エーシア ジャパン 子ども、青年、大人（父親・母親・お年寄り）とい った各世代の人々が共に関わり合いながら主体的 に地域の活動に参加し、「地域の伝統・環境の保全」 と「地域経済の発展」との両立を実現させる社会の 構築実現に向けて取り組んでいる認定 NPO 法人。	東京都 渋谷区	ベトナム フエ	バイオ農家支援、子 どもへの環境教育 支援
4	カンボジア日本人材開発センター (CJCC) カンボジアにおいて、JICA、日本企業などと協力し て、人材育成事業、日本語教育、文化交流事業など を行う。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	文化交流部門でイ ベントやスタディ ツアー受け入れな どのサポート

3. これまでの受入団体および実習概要一覧

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
1	JICA スリランカ事務所 事務所 独立行政法人国際協力機構スリランカ事 務所 - 総合的な政府開発援助 (ODA) の実施機関。	東京都 千代田区	スリランカ コロンボおよび スリランカ国内 事業地	広報を中心とした 事務所事務作業補 助 (場合によっては 地方プロジェクト 出張同行)
2	NGO サルボダヤ運動本部 農村村民の自立を目指し、有機農業の振興、母子 保健衛生、マイクロクレジット等の活動を先駆的展 開するアジア地域でも最も成果を挙げている NGO。	スリランカ モラトゥワ	スリランカ モラトゥワ	本部国際部事務作 業補助

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
3	セワランカ スリランカ最大の現地 NGO の一つ。宇大国際学部実施している JICA 草の根技術協力事業「プランテーション農園の小学校への課外活動支援」プロジェクト (UU-TEA Project) の現地パートナー組織。	スリランカ ハットン	スリランカ ハットン	プロジェクト対象 学校でのモニタリ ングと広報補佐及 び日本文化紹介
4	特定非営利活動法人 ラオスのこども ラオスの子供達の教育環境の向上を願い、日本および現地ラオスで活動を続けている国際協力 NGO (特定非営利活動法人)。	東京都 大田区	ラオス	ラオスのスタッフの アシスタント(セミナー・教材準備、図書室で子どもと遊ぶ)
5	KURATA PEPPER Co. Ltd. 古い歴史があり、ヨーロッパでは最高品質として有名であるカンボジアの胡椒が、内戦により農園は壊滅。その「世界一美味しい胡椒」を復活させようと、産地農家を回り、地元の人々と共に、胡椒農園を広げた胡椒農園経営・胡椒卸販売の民間企業。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	事務作業補助、選別 作業、畑研修 ※農業研修は、本人 が望めば男性でも 女性でも OK。
6	特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパン 紛争や災害、貧困などの脅威にさらされている人びとに対して支援活動を行う NGO。	広島県 神石高原町	スリランカ東部州 トリンコマレー県	内戦帰還民地域で の復興支援活動補助
7	特定非営利活動法人 かものはしプロジェクト 子どもの人身売買問題の解決に取り組むことから始まった認定 NPO 法人。カンボジアの貧困層の女性を雇用しものづくりを行うコミュニティファクトリーを運営し、現在はライフスキルのトレーニングを主軸ミッションとした活動を行う。	東京 渋谷区	カンボジア シュムリアップ	コミュニティファ クトリー (工房) の 来客対応、ショップ のお手伝い
8	アーシャアジアの農民と歩む会 インドの貧しい農村において、農村の基盤となる「農」を通じて、アジアの農民の自立と持続可能な暮らしを実現し、共に生きるための事業を推進する NPO 法人。	栃木県 那須塩原市	インド・ウッタ ルプラデッシュ (UP) 州アラ ハバード市およ び近郊	農村開発事業(有機 農業・教育支援・保 健衛生など)の見 学・作業体験、人材 育成事業(ハンディ クラフト縫製・食品 加工など)の見学・ 作業体験、有機農業 組合活動(朝市での 販売・日本米やキノ コの販促など)の見 学・作業体験、広報、 総務の事務補助等
9	パンニャサストラ大学の日本語・ビジネス研修センター プノンペンにある私立大学の日本語・ビジネス研修センターで、宇都宮大学大学院国際学研究科博士課程を修了したサ・ソチア博士がセンター長。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	日本語教育、日本・ カンボジアの文化 交流活動のなどの サポート

	団体名	所属地 (本部)	実習国・実習地	実習概要
10	株式会社パデコ 日本の開発コンサルタント企業として、国際協力機構より業務委託を受け「カンボジア国教員養成大学設立のための基盤構築プロジェクト（第1年次）」（2017年1月～2019年5月）を実施。	東京都 港区	カンボジア プノンペン	小中学校教員養成課程のカリキュラム・教材開発支援プロジェクトの職場体験。調達、広報の手伝い等。
11	公益財団法人国際開発救援財団 発展途上国の子どもたちのために、国際協力、援助事業、緊急援助事業、広報啓発事業を行う公益財団法人。	東京 千代田区	カンボジア プノンペン	小児外科支援、給食支援、農村開発、などのサポートを行う。
12	高野山 宿坊櫻池院 高野山にある宿坊寺院の一つで、1100年代に白河天皇代4皇子覚法親王により作られた。	和歌山県 伊都郡	和歌山県 伊都郡	宿坊での接客、部屋の準備、食事の準備等。
13	島キャン（受入れ先ホテル、奄美島） 離島で職業体験をしながら島おこしインターンを行う。	東京都 新宿区	奄美	離島の地域活性化を目的としたホテルでの研修。

4. 実習生からの報告

実習生 かのう ななこ 加納 南菜子

所 属： 宇都宮大学 国際学部 国際学科 2年
 実 習 先： カンボジアー日本人材育成センター (CJCC)
 実習期間： 平成 31 年 2 月 11 日～2 月 24 日

実習目的

実習目的は、第一に、働くことを通して就職・自分の将来について考えることである。私は将来の夢が決まっていないため、本実習に参加することで働くことのイメージを具体化し、自分の向き不向きを知ることで今後の大学での学びや就職活動の参考としたい。第二に、JICA 機関の業務について学ぶことである。海外で働くという経験をするとともに、国際的な仕事での実際の仕事や、実際に必要とされる能力について知る。その他には、



フェスティバルで職員の方々と

CJCC の職員の方々との対話を通し様々なキャリアを知ること、英語を実際に使い、自らの英語力を把握することである。

学んだこと

初め 2, 3 日間の仕事は、カードをはさみで切ったり、手紙を封筒に入れたりするといった作業だった。メール、Word、Excel などの基本的なことはできる前提で仕事を与えられるので、大学生のうちに基本的なスキルは身に付けておく必要があると感じた。初めは全体的な仕事内容を全く把握できていなかったもので、一つ一つ仕事が終わるたびに上司に次の仕事を確認しなければいけなかった。仕事は日を重ねるうちにわかってきたが、仕事をスムーズに進めるためには、仕事の全体的な流れを理解することが大切だと感じた。個々の仕事自体は作業であったり、パソコンでの資料作りであった、内容から学ぶことはそれほど多くはない。しかし、どのようにしたらスムーズに連携して仕事を進めることができるか、どのようにコミュニケーションをとるかが重要だと感じた。

絆フェスティバルでは主にアナウンスを担当したので、絆フェスティバル前の仕事は、同じくアナウンス担当の寺澤さん、ボルメイさんなどとアナウンスの原稿を作成することだった。タイムスケジュールを見てアナウンス時間を決め、イベント担当者に詳細を聞きながらスクリプトを作成した。何度も修正を重ね、改良して作ったスクリプトだったが、絆フェスティバル当日の読み上げる直前になってミスが見つかることがあり、チェックが行き届いていなかったと反省した。思い返すと“取りあえずここだけ修正して、残りは後でやろう”として修正し忘れたものや、コピー&ペーストして修正し忘れたもの、二人で同時に作成する体制、チェック体制、など様々な原因があった。

英語に関しては、私の能力不足を感じたとともに、そこからどうカバーするかという対応も学んだ。スピードが速くカンボジア訛りの英語を理解するのは大変だったが、いちいち私が確認して会議を止めるわけにはいかなかった。そこで、会議が終わった後に、わからない所の確認と、内容一覧の確認をした。初日に言われた「聞くことは仕事」という言葉を思い出し、わからないことがあれば聞くことを心掛けたが、10 割理解しようとする時間がかかりすぎるので、逐一自分の理解を確かめてもらったり、その場その場で聞くなど柔軟な対応が必要だと思った。仕事を説明してもらう際には、口頭での確認だけでなく、実際に例を見せてもらおう、自分で少しやってみて確認してもらおうなどの工夫が必要だった。フェスティバル中に担当した受付では、英語の対応が多いので、必要な英語はすぐに調べていつでも使えるようにしたり、テンプレートを覚えておいたりすることで対応ができると感じた。

インターンシップの最終日には、たくさんの方にもう帰るの、短すぎる、寂しいと言っていた。短い期間だったが、多くの職員、インターン生の方々に気にかけていただき、ここまで親身に接していただけたとは思っていなかった。明るく楽しい環境で多くのことを学べたのは周りの方々のお陰だと再認識した。

実習生 ^{みうらあすさ} 三浦あずさ

所 属： 宇都宮大学 国際学部 国際学科 2年
 実 習 先： アンコールクッキー (カンボジア)
 実習期間： 令和元年9月2日～9月28日

学んだこと

何事も挑戦してみる、これが最も大切だと感じた。私は歌やダンスが苦手で、どちらも人前で披露したくない。香りの強いハーブ系の食べ物が嫌い。間違えたくないので必要最低限のことしか話さない。これはインターンをする前の自分である。だが、後悔したくないと思うようになってからは、まず挑戦してみることにした。それで自分に合わない判断するのは全く問題がないと思う。しかし、以前の私のように、やる前から出来ない嫌いと、と決めつけてしまうと何も始まらない。実際、カラオケでスタッフのみんなと踊り、ハーブの香るクメール料理を毎日食べ、くだらない会話をした。結果、非常に充実した11日間を過ごすことができた。また、周りの人が勧めてくれているのに断るより、挑戦したほうが、相手も気持ちが良い。逃げてばかりではなく、正面から向き合ってみることも良いと知った。

また、当たり前なことだが、人と人は対等である。なるべく簡単な日本語を使おうと心がけているからかもしれないが、たまに、ため口、命令口調で話す日本人がいた。私は、カンボジアの人を見下していると感じた。相手がどこの国の人でも、人は人、自分がされていやなことをしてはいけない。反対に、優しくすると優しさが返ってくる。私は、何か特別なことをしたわけではないが、毎日誠実に働いたと思っている。スタッフの人ともコミュニケーションをとり、職場の雰囲気明るく、楽しくしたかった。そのためか、最後の出勤日には、サプライズでケーキとプレゼントを用意してくれた。心から感動したし、今後も何か力になれることがあったら、何でもしたいと感じた。どちらもごく普通のことだが、普段の生活で思い出さないことを思い出すことが出来て良かった。

将来への影響

現在、私はまだ就きたい職業が明確に定まっていない。だが、今回の実習を通して、自分の好きなことが見えた。それは、外国人と関わるということである。外国人といっても、結局人は人で有り、区別するものではないが、今まで私が生きてきた19年間の生活と異なった習慣、文化を持っている人と関わりたい。私は、向上心があり、何事にも挑戦してみる事が自分の良いところだと思っている。そのため、毎日が新鮮で、新しいものに触れる約2週間のカンボジアでの滞在は、私の生活に潤いを与えてくれた。

また、私は自分の好きなもの、気に入っているものを人と共有することが好きだということに気がついた。アンコールクッキーで、特にお気に入りの商品を、お客様に買ってもらいたい、また美味しいクメール料理を日本の家族や友人に知ってもらいたい、と思うことが何度もあった。これがどのような職業に繋がるかはわからないが、今まで職業の選択肢にはなかった、なにかを発信する職業、という新たな選択肢が増えた。

さらに、毎日、日本人観光客と接したことで、私にはあまり旅行会社関係はむいていないかもしれないと感じた。団体で海外旅行をするのは概ね、年齢の高い人たちであり、その人達をまとめあげるのは難しい。今のうちから職業の選択肢として外してしまうのは早いかもしれない、と考えたこともあったが、就活やインターンのことを考えると、取捨選択の時期でもあるのかもしれないと考えるようになった。

実習を通して、好きなこと、苦手なことを改めて見つめ直すことができた。



スタッフとの昼食風景



ユニフォームで現地スタッフと

実習生 えびさわ すずは 海老澤 涼羽

所属： 宇都宮大学 国際学部 国際学科 3年
 実習先： カンボジア日本人材開発センター (CJCC)
 実習期間： 令和元年9月2日～9月13日

実習成果

今回の実習で実際に働くためのスキルを身につけることは、完璧に達成したとは言えないが、働くことについて知ることができ、この経験をキャリア形成に繋げるということはできると思った。

なぜスキルを身につけることが達成できなかったと評価したかという点、私は今回の実習であまり積極的に行動できなかったように感じたためだ。実際に働くとなるともった自分から仕事を探し、行動する必要があると思うので、まだ私にはそういった面が足りなかったように感じる。しかし、この経験はとても良いものであり、キャリア形成に繋げるためにはとても様々なことを学べた。

また、日本文化に関心を持ってもらえる方法を考えることは自分の中ではできたように思った。このイベントに来た沢山のお客さんの様子を見て、浴衣やお月見など日本の伝統文化に興味を持ち楽しむ人が多くいることを実感すると同時に、自分を含め、日本人自身が日本の文化を誇りに思うこと、もっと知ることが大切だとも感じた。



イベントでの着付けの様子



イベントでのステージ発表の様子

学んだこと

今回の実習を通して、国際協力機関で行われている業務を知ることができた。国際協力と聞くと私は今まで実際に現場に行き、活動を行うというアクティブなイメージがあった。しかし、今回の実習中に行っていたのはデスクワークが中心であり、考えていたものとは違ったが、このデスクワークのような業務も十分に大切であるということを感じた。

私が今回行ったデスクワークはイベントで使う物や動画の準備であり、当日準備した物が使用され、成功しているイベントの様子を見るとこの準備段階の大切さ、また机と向き合っている状態ではあるが楽しいと感じた。

このことから、国際協力はアクティブな活動だけでなく色々な方向からのアプローチがあり、どれも大切であることを学んだ。

また、文化交流の大切さについても学んだ。イベントへの準備のために浴衣の着付けの練習や、よさこいや盆踊りなど日本の踊りとカンボジアのダンスの練習をした。それらをしている時間は私自身もすごく楽しく、みんなも楽しそうであった。イベント当日には沢山のお客さんが訪れ、浴衣の着付けを嬉しそうにしてくれる人、盆踊りやよさこいを一緒に踊りながら見てくれる人、お月見に関する劇を笑いながら楽しんでいる人、お団子を美味しいと食べている人など様々な様子が見られた。他国の知らない文化であるが、体験するとこんなにもみんな笑顔になるのだと知った。相手の国について知る上でも文化交流を行うことは大切だと感じた。しかし、日本の文化であるにも関わらず私よりもカンボジアの人達の方が上手で詳しくだったので私たち日本人はもっと自国の文化を知るべきだとも感じた。

将来への影響

私は、国際協力という面で今までしていたイメージと違う現場を実際に見た。しかし、この経験は私にとって良いものであったと感じる。今まで想像していたアクティブな活動もちろん必要なことであるが、今回経験したようにデスクワークなどが多い仕事もあること、そしてそれもまた重要な役割を果たしていることを知ることができたためだ。私は将来について現在明確に考えられていない。しかし、今回の経験から国際協力に関係する仕事を行いたいという気持ちは強まった。

また今回の実習では、笑顔で常に楽しそうに働く彼女たちの姿が一番私の印象にとっても残っている。どのような職に就くとしても楽しむ気持ちを忘れないで働けるような職に就きたいと感じた。

実習生 あきむら こうへい
秋村 康平

所属： 宇都宮大学 国際学部 国際学科 3年
実習先： アースアンドヒューマンコーポレーション
(エチオピア)
実習期間： 令和元年8月12日～9月6日

実習目的

- 国際協力機構(以下 JICA とする)の ODA プロジェクトとし実施されている当該プロジェクトにインターン生として加わり、開発コンサルタントとして活動する総括の働き方を見ることで支援者としての立ち位置を理解し将来私が国際協力に携わる際の支援者としてのあり方について見直す。
- 総括の働き方やカウンターパートとのコンタクト方法を見ることによりプロジェクトマネジメントについての理解を深める。
- カウンターパートと交流を通じて良好な関係を構築する。
- プロジェクトやカウンターパートが行う活動について理解し、現場にすぐ適応できるようにする。ある程度の専門性を身につける。



アダマ農村地域での調査



週末日本人会への参加

学んだこと

- 総括のプロジェクトにおける立ち位置を見ることによって、どのようにプロジェクトをマネジメントするのかという点を理解することができた。
- 渡航前はワークショップにおける秩序が乱れており、管理ができていないのではないかと感じていたが実際に現地へ行くとワークショップはカウンターパート主導で行い、ディスカッションやグループワークも活発に行われており、参加者の前向きな姿勢を伺うことができた。また参加者が整理整頓を意識的に行うなどカイゼンのマインドを意識した行動も伺うことが出来た。そのためにプロジェクトが上手く進行しているということを理解したと同時に、今回とは逆に彼らの態度があまり建設的でない場合に支援者としてどのような立ち振る舞いをする必要があるのかということを考えることができた。また日本では日本企業のあり方(ブラック企業など)についてあまり良い印象を受けていなかったが、EWTI で実施されているカイゼンのように身の回りの小さなことから意識して行動することによって彼らの上昇志向が高まるなど日本人の働き方が良い方向性に向く可能性があるということを確認することができた。
- 本邦研修での掘削技術や電気機械にする講義、アダマの上下水道局やハンドポンプの調査等を通じて主に地下水に関する知識をある程度獲得することができ、プロジェクトの理解をより進めることができた。
- 英語が母語でない者同士でコミュニケーションをとる際にどのような手法を用いると伝わるか、より理解してもらえるかという点を特にワークショップの記録作成補助を通じて学ぶことができた。
- アダマの農村にてハンドポンプの調査を行った際に2つハンドポンプあるうちの1つは機能しておらず、しかし住民は機能する1つがある状況に満足しているという状況であった。この点から住民は機能するハンドポンプ1つに頼ってしまっており、機能しないハンドポンプのメンテナンスがこの次になってしまっていることを理解した。この状況でどのように誰がメンテナンスを行うのかという点が今後の課題
- 受け入れ先であるアースアンドヒューマンコーポレーションにて行った総括以外の方とお話を通じて、プロジェクト内でできることとできないことの区別や国家との利害関係などプロジェクトを実施する上での様々な側面を学ぶことが出来た。の1つであると感じた。

将来への影響

- 大学卒業後の進路について、大きく国際協力に貢献したいという願望しかなかったが、JICA エチオピア事務所、休日に開催された日本人会やインターン中の JOCV の方々との交流を通じて自分の中で JOCV が非常にプッシュされた。大学卒業後のビジョンを明確にすることができ、またそのためにやるべきことも明確化された。

実習生 あしめる はるか 阿閉 陽香

所属： 宇都宮大学 国際学部 国際学科 3年
 実習先： ブリッジエーシアジャパン
 実習期間： 令和元年9月9日～9月24日

実習の成果

今回のフェ事務所での活動は大きく2つありました。1つ目は小学4、5年生を対象に小学校で実施した環境教育活動です。2つ目は実際に消費者に直売所直営の畑の視察や農作業を体験してもらう「生産者訪問イベント」です。この2つの活動において私は小学生対象にはプラスチックのリサイクルを、また、生産者訪問イベントでは日本の和食についてをパワーポイントを用いて、発表する対象に応じて聞き手を引き付けるような工夫をして発表することが出来ました。発表した時は、イベントに参加している人たちがとても熱心に私の発表に耳を傾けてくれて、とても嬉しかったです。また、活動の中で気がついたことや感じたことがあった時、積極的にスタッフの方々とシェアをするようにしました。スタッフと意見を交換したことによって次の活動がスムーズになったこともありました。言葉の壁がある中で、自分なりにコミュニケーションを図ることが出来たと思います。反省点としてはいつもと異なる環境の中で予想以上に距離が遠かったりなどの理由で時間に間に合わなかった時もあったのでそこを気をつけていきたいと思います。1週間という短い期間の現地での実習の中で、自分自身もスタッフと一緒に発表であったり、イベントについての話し合いであったりに積極的に参加したことで外部からのお客様という存在よりもスタッフ側に立って活動することが出来たと感じています。



Thuy Xuan 小学校にて

学んだこと

異なる場所（日本とベトナム）でスタッフ全員が同じ方向を見て、同じ歩幅で活動を進めていくためにはどうするべきかということは今回の実習での大きなポイントであったと私は思います。BAJでは東京事務所とフェ事務所との間でスカイプを頻繁に行い、意見をシェアしたり、東京事務所側がフェ事務所側が必要としている事項について調べてスカイプ内でパワーポイントを用いて発表を行ったりしていました。私は今回のインターンシップの中でスカイプミーティングに2度、参加したのですが、東京事務所側が調べてきたことを詳細に発表したり、フェ事務所側が分からなかったことについて質問をし、意見を発言したりするなど双方が積極的に意見を交換していました。このようにこまめに情報交換をすることはみんなが1つの方向に向かっていく中で重要だと考えます。また、今回の実習で最も学んだことはコミュニケーション能力の大切さです。東京事務所でもフェ事務所でもスタッフの方々が私の意見を聞いてくださる機会が多くあって、他の人の意見も踏まえながらも自分の意見もシェアすること、自分の意見やアイデアへの根拠を明確に持って発表するということの大切さを学びました。また、それは言語が異なる現地でも同じで、伝えることが少し難しくても一生懸命に自分の考えを主張することが大切だと感じました。

将来への影響

私はインターンシップに参加する前から私はNGOの活動に興味を持っていました。この実習を通して、より明確に職場やスタッフの方々の雰囲気、実施している活動、現地との関係など理解することが出来たと思います。また、実習を行う以前は一人だけで海外の現地のスタッフと活動することは少し難しいと思っていましたが、実際に現地で活動を行なってみて、一人でもコミュニケーションなど活動を実施していく中で必要なことができ、可能性を感じました。東京事務所のスタッフの方々にも青年海外協力隊に参加した人や長年、海外で生活した人たちなど多種多様な人たちがいました。そのような人たちのお話を聞くことは将来のキャリアを考える上でとても貴重な経験や情報になりました。やはり、本や講義の中だけでは気付くことが難しいことも今回の活動を通して感じる事があって、その点で今回の実習は私の中でとても大きな意味を持ったものであったと思います。

令和元年度 国際キャリア教育プログラム 報告書

協力者一覧

主 催： 大学コンソーシアムとちぎ、宇都宮大学

後 援： 宇都宮大学国際学部同窓会、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、
NPO 法人 宇都宮市国際交流協会、いつくら国際文化交流協会、JICA 筑波センター

協 賛： (一財)栃木県青年会館、(公財)あしぎん国際交流財団

執筆・編集担当

宇都宮大学 国際学部 「国際キャリア教育運営委員会」

国際学部長	佐々木 一隆
教 授	重田 康博
教 授	湯本 浩之
教 授	吉田 一彦
教 授	高橋 若菜
准 教 授	バーバラ・モリソン
准 教 授	スエヨシ・アナ
准 教 授	栗原 俊輔
助 教	飯塚 明子
助 教	アミン・ガデミ
コーディネーター	佐藤 裕香

発行月： 令和2年(2020)年3月

発行者： 宇都宮大学 国際学部

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350

TEL 028-649-5172

Email kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

Website <http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/index.html>





宇都宮大学
UTSUNOMIYA UNIVERSITY